
魔法少女リリカルなのは 最初の魔導師と転生者

サックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 最初の魔導師と転生者

【Nコード】

N5617J

【作者名】

サックス

【あらすじ】

この物語は主人公「葵・日向」あおい・ひなたが様々なアニメが混ざった世界で冒険し愛とハーレムと原作崩壊をする物語です

更新は不定期ですのでご了承ください

プロローグ（前書き）

初めまして作者のサンクスです

酒に酔った勢いで書くことになった初心者です

脱字やおかしな点が色々と出てくるかも知れませんが温かい目で観てください

プロローグ

それは小さな出会いから始まった

「俺は葵・日向だ。よろしくな」

俺にとっては焦がれ待ち望んだ出会いでもあった

「ようやく会えたねお兄ちゃん」

そして俺は私達は出会った

「アンタはアタシ達を幸せにする義務があるの！」

「それは俺が望んだ未来じゃないんだけどな」

そして少年と少女達の行動によって世界は少しずつ変わっていく

「自分達の世界は自分達で守るべきだ」

少女達が少年を巻き込み少年が世界を巻き込む

「日向君も一緒に管理局に入ろう♪」

「だが断る！」

世界は少年と少女達を中心に少しずつ動き出し

やがてそれは大きくなり世界を人々を優しく包み込んでいくだろう

「この世に悪があるとすればそれは人の心だ！」

そして少年が交わしたとても小さく儂い願いを叶えるために今日も少年は広大な世界を熱く駆け巡る

魔法少女リリカルなのは 最初の魔導師と転生者始まります

キャラクター設定（前書き）

キャラクター設定です

キャラクター設定

キャラクタープロフィール

◆名前 葵・日向 (あおい・ひなた)

◆年齢 17歳

◆誕生日 8月1日

◆見た目 中性的で女に近い顔立ちだけど一応色男である。
。髪の長さは大体はやてと同じ位で茶色である

◆出身 地球 日本の埼玉県春日部市出身

◆魔法術式 バビロニア式 オリジナル

◆魔導師ランク 総合SSSS

◆好き／歌 漫画 ゲーム 温泉 自分の欲望に忠実な人

◆特技／ハッキング 射的 ボケ ツツコミ

◆嫌い／ゴキブリ 貝類 KY 偽善者 変態

◆苦手な事・人／地味な作業 ツンデレ ヤンデレ

◆デバイス エボルト ゼファー

備考

◆他人と関わることがあまり好きではない。小さい頃に双子の妹を事故で無くしてから無気力な人間になった。そしてそれが原因で重度なシスコンになり妹属性の女の子を見るとありえない位の暴走する。最近はシスターなプリンセス計画を考案しているらしい。小さい頃から女子並に身長が小さく、それをコンプレックスと思っていてチビとか小さいと言われると破壊の化身へとクラスチェンジする。妹を亡くすまでは老若男女を問わず人を引き付けるカリスマ性を持っていた。

無気力になってからも友達が困った時にコッソリ手助けをしたりするが本人はあまりその性格は偽善者みたいで好きではない

◆備考／エボルト

デバイス型ロストログアで日向が異世界に行くキツカケとなったロストログアで日向の前世だった人の記憶と性格がAIとして埋め込まれている。実は結構腹黒いらしい（未確認情報であり現在調査中）ロストログアとしては聖王のゆりかごよりも危険であるが今は日向以外誰も使いこなせないので管理局からはあまり危険視されていない。

◆使い魔

◆名前 ヒヨコくん

◆備考 日向がエボルトの知識と前世の記憶を元にした魔法陣から生まれた世界最狂のヒヨコである。

◆見た目 大きさは手の平サイズの全身黄色いヒヨコです

。 ※（チヨ○ボではありません）

◆強さ なのは、フェイト、はやての三人と同時に戦えば互角に戦える位強い。

◆性格 熱血でありちよつとヤンキー。

◆技 体当たり ビンタ 雄叫び

第1話 始まりはいつも突然に（前書き）

おっかなびつくりで書いて見ました

初めての小説なので優しく観てください

第1話 始まりはいつも突然に

第1話 始まりはいつも突然に

人は自分の常識の理解の範疇を越えると逆に冷静に成るって本で読んだ事が有るが実際は違った。

冷静に成るんじゃないと諦めの境地に入るんだと身をもって思いしらされた。

今、俺の目の前には黒いスーツを着てサングラスを掛けたスキンヘッドのお兄さん方々が拳銃をこっちに向けて構えています。

その後ろにはガムテープとロープで喋ることも動く事も出来ない少女が二人います。

これはアレですね。俗に言う誘拐という奴ですね？

アハハハいきなり死亡フラグですか！！！！

一分位前まで自分の部屋に居たのになんでさ！？

「小僧！一体何処から現れやがった！」

スキンヘッドの一人が警戒しながら聞いてきた。

自分の部屋からだよ！って言ったらぶちギレるだろうしなあ、まあ、逆の立場で家の部屋から来ました♪なんて言われたら自分だってキレるし、まずそんな話を初対面で信じる奴なんて殆どいないし信じる奴が居たらすぐに精神科に行かなければならない。

本当にどうしたものか。こういう時、咄嗟に嘘を言えない自分が恨めしい。

というか何故こんな事になったんだ？

回想

あれは確か……いつものように学校から帰って部屋で友達から借りたアニメのDVDを見終わって寝ようとした時にアレと出会ってしまっただ……

「明日から春休みか 高校に入学してからもうすぐ一年かぁ。本当あつという間だったな。そろそろ進路の方も考えないとな。まあ、今考えても直ぐに答えが出る訳でもないし、取り合えず今日はもう寝るか。」

ミ、…ツケ・タ・

ビクッ！！「な、なんだ！？い、今の声みたいのは！？」

ミ・ツケ・タゾ モウ・・ヒトリノ オ・・レ

「空耳じゃない！間違いなく聞こえたぞ！」

ヤッ・ト、デ・アエタ オレデアリ、オレジャ・ナイソンザ・イ

「俺であり……俺じゃない存在？」

アア、オマエナラ、オレニデキナカタコトガ、オマエニシカデキ
ナイコトガ、デキル

「訳が解らん、俺に出来ることとか出来ないこととかなんなんだ！
いいたいことが有るなら姿を見せろ！」

内心ビビりながらも俺は自分の弱みを見せないように強気に出た。

オレノナマエ・ヲ　ヨ・・・ベ・・・

オ・レノナマ・エハ・・・『エボルト』・・・

「エ、エボルトか！」

ソウダ　モットオレノナマエヲツヨクヨベ　ソウスレバオレハオマ
エノマエニスガタヲアラワスコトガデキル

俺はマジで心の中でビビりまくった。ゾンビとか吸血鬼とか出て来たらマジでおわりだ。昨日ホラー映画見るんじゃないかった。そしてさっき強気に出るんじゃないかった。そして俺は信じてもない神様にマジ頼みしながら覚悟を決めた。

「よ、よし　逝くぞ！（誰か助けて下さい！）」

「エボルトーーーーーッ！！！！！」

俺がエボルトの名前を叫んだと同時に、俺の視界がまばゆい光によって埋め尽くされた。

そして光が治まり眼を開けると、そこには宙に浮いた一枚のカードがあった。

『初めまして。我が主、日向』

これが俺の人生を大きく変える最初の出会いだった。

第2話 不可能を越えて（前書き）

今回は回想のみです

第2話 不可能を越えて

第2話 不可能を越えて

『初めまして。。我が主日向』

俺は現在の状況に頭が追い付いていなかった。

目の前にいきなり現れたカードが宙に浮いてるだけでも驚きなのに、あろうことか喋ったよ。このカード。

……でも、まあ、ゾンビや吸血鬼とかじゃなくて本当に良かったよ。

とりあえず少しずつ落ち着きを取り戻した俺はカードの発した言葉の意味について聞いてみることにした。

「俺が我が主ってどういう意味だエボルト？」

『そのままの意味だ。我は主の理解できる言葉で現すなら『デバイス』でもあり『ロストログア』でもある』

「デバイスにロストログアだって!!?」

それって、おもいっきりリリカルなのはじゃないか!??ってゆうか、カードと普通に話してる光景ってかなりシュールだな。

「まあ、主という意味は分かったけど、なんで俺が主なんだ?（この際、アニメの話だとか、ありえね〜、とか言うのは言わない方がいいな。実際、目の前で有り得ない光景を目の当たりにしてるし。）

」

『それは……主が前の主の生まれ変わりだからだ』

はい？

生まれ変わり？

俺が？

誰の？

目の前で浮いてるカードの前の主の？

嗚呼……また頭が追い付かなくなってきたよ。

落ち着け俺。クールになれ。現在の時点でもう俺の常識は覆されたんだ。これ以上非常識な事が起きてもそれが当たり前だと思えばいいのだ！アニメの世界にオカルトも、ここまで来ればもう動じないで受け入れよう。

取り合えず俺は疑問に思った事を聞いてみることにした。

「なんで俺が前の主の生まれ変わりだと分かったんだ？」

『それは我が前の主の人格を元に作られたAIだからだ』

このカード、エボルトの話では、前の主は『魔法少女リリカルなのはの世界』で最初の魔導師だったらしくて自分が魔導師として魔法を世界中に広めた事によって幸せになる人よりも不幸になる人間の方が圧倒的に多いことに気が付いてしまったらしい。そして、自分が死んだ後になっても今まで以上に不幸になる人が増えた時にどうにかする為の最終手段として自分の人格と知識を記録した自律型の

AIを造ったらしい。その後、エボルトは次元世界を見守って来たが、不幸になる人は増え、更には人の手で次元世界まで消滅してしまいう出来事まであったらしい。

まあ、これはリリカルなのはを見たからアルハザードという例でよく理解出来た。

過ぎた力は己の身を滅ぼすというがまさにこの事であると思った。そしてエボルトの力でもどうにも出来なくなった時の最後のストッパーとして自分の生まれ変わりに協力して貰うという何とも他人頼りな事この上ない最終手段でああった。

エボルトは結構昔から生まれ変わりを捜していたらしいが俺に出会うまで一人も生まれ変わりは居なかったらしい。

随分長い説明になったが、まあ、大体の事情は理解した。

「それで、俺に協力して欲しいという訳か」

『はい。主もアニメのDVDで時空管理局の裏の顔を見たはずだ。生き残るべき人が無惨に死に、生きる価値のないクズ共がのうのと生きているこの現状を！』

確かにあんな上層部が黒い組織、潰れた方が良いとは思ってたが：

……

「力を貸してくれないか？我が主日向」

うーん。これは結構難しい話だな。最悪、命を落とす可能性も十分にある。

それに今の俺じゃ常識となった世界の流れを変える事が果たして出来るのか？

いや……その前に俺に何のメリットがあるんだ？

エボルトにはなんの義理も無いし、特に命を賭けてまでこんな危ない橋を渡る必要も無い。

「エボルトに協力することによって俺に命を賭けるに値するメリットはあるのか？」

『はい。主に取っては命を懸けるに値するメリットが一つだけあります。我の居る世界はリリカルなのはの世界というより、パラレルワールドという表現が正しいですね』

「それはどういう事だ？」

『我的世界は厳密に言うと、『リリカルなのは』だけでなく、『他のアニメ』や『漫画』ともリンクしています。当然、主の世界ともリンクしています。もしかしたら『主の妹殿も事故で死なずに我的世界で今も生きている可能性が有るかも知れない。』この世界に存在する人間で我的世界に存在しないのは主だけだからな』

「ツッ！！？なんでお前が妹の事を知っているんだ！？」

『主が我をこの世界に呼んだ時に主の記憶が我に流れてきたのだ』

「ムッ！人の記憶を覗き見なんて悪趣味なカードだな（怒）」

『そう怒るな主。これはどうしても起こってしまう転移の副産物の

ような物だ。当然、逆の事をすれば同じ様に私の記憶を主が見ることも出来る』

「別にお前の記憶には興味ないし。それよりも、さっきの話は本当か！」

『ああ。本当だ。百パーセントという訳では無いが、生きている可能性は十分にある』

「確実では無いのか？」

『残念ながら確実ではないが、可能性が有るというだけだが、……でも主には命を懸けるに値することだろう』

「ああ、勿論だ！ 例え、パラレルワールドでも、俺の妹で無くても、元気に生きてさえいてくれれば俺はそれでいい。俺が不甲斐ないばかりに妹を守れなかった。助けてあげる事が出来なかった。約束を守ることが出来なかったが、妹が生きてる可能性があるなら俺はそれに賭ける！ それに、この世界に未練は無い！ 行こう、エボルトの世界に！」

『有り難うございます。我が主日向。主の命は我が全力でお守り致します』

「ああ、頼むぜ。相棒！」

『はい、我が主日向』

こうして、俺の異世界を全ての人々を巻き込んだ最大級の大冒険が始まりを告げた。

第3話 エボルトは腹黒? (前書き)

今回で回想シーンは終わりです

本当はもっと短くする予定でしたが自分が未熟なせいで長くなりま
した本当申し訳ないです

第3話 エボルトは腹黒？

第3話 エボルトは腹黒？

（回想中）

『有り難うございます。我が主日向。主の命は我が全力でお守り致します』

「ああ 頼むぜ相棒」

『はい。我が主日向』

『では主、向こうの世界に行く前に我と契約をしましょう』

「契約？」

『「はい。契約です」』

「それをする事によって何か得することでもあるのか？」

『はい。契約をすることによって、我を主専用のデバイスにする事が出来ます。後、前の主の魔力、知識、身体能力、レアスキルを受け継ぐ事が出来ます』

なるほど、確かにそれはお得だな。

『主もSSランクの魔力は有りますが、どんなに大きい魔力を持っ

ていても、使い方が解ら無ければ宝の持ち腐れです』

えっ!？ 俺、魔力を持ってたの? っていうか、SSランク? めっちゃくちゃ魔力持ってんじゃない!?

『では、契約を始めますよ主。……目を閉じてください』

「あ、ああ、解った」

俺は目を閉じて心を落ち着かせた。

『では、契約を始めます』

エボルトが契約を始めた途端、部屋の空気が変わった。

『我、悠久の時を見守りし物…名をエボルト』

『我、今こそ悠久の誓いを果たすべく、彼のものの転生者と契約を結ぶ』

その言葉を聞いた直後、俺の身体に変化が起きた。

「痛っ!?! 頭があ割れるように痛てえええ!」

日向は身体を押さえながらのたうち回った。

『契約完了の印です。今、主の脳には前の主の知識が流れ込んでいます。そのために必要な頭痛です』

「そ、そ…んな事…聞いて…ね…え、…ぞ………」

俺は頭痛に耐えながら声を搾り出してやり場の無い怒りをエボルトぶつけた。

『はい♪聞かれなかったのでお答えしませんでした♪』

俺はエボルトに対してかなり殺意を抱いた。

「いつか必ず絶対に泣かす!!」

『それだけの元気があれば、もう大丈夫ですね。では、向こうの世界にさっさと逝きますよ』

「何処をどう見れば大丈夫に見えるんだよ! っていうか! 行くが逝くになってるぞ!？」

『あつ、そういうえば 言い忘れていましたが、前の主の能力を馴染みやすくするために、主の身体を幼年化しますからご了承下さい』

……………はい？

『それでも能力が落ちる事は無いのでご安心してください』

……………はい？ 今なんった!？ このおんぼろデバイスがあ！

『では逝きましょう♪』

「ちょ？ ちよっとまっ——————」

『転移開始』

「いつか絶対シャーリーに分解させてやるからなーーーーーっ
！！覚えてろよーーーーーッ！！（怒）」

回想終了

第4話 初戦闘とコンプレックス（前書き）

読者の皆様こんにちはは作者のサンクスです

烈風さん感想有り難うございます

こんな駄作に感想を書いて貰えて本当に感謝感激です

これから頑張って書きますので応援よろしくお願いします

第4話 初戦闘とコンプレックス

第4話 初戦闘とコンプレックス

（回想終了）

回想時間約30秒

と、まあ、こういういきさつが有ったわけだが
あんのおんぼろデバイス！なんて所に送り付けやがった！
ふざけんじゃねーぞ！しかもエボルトの奴、居ねーじゃねえか！？
（怒）

このやり場の無い怒り何処にぶつけよーか！

「小僧！、何処から現れたか答えろ！」

黒服Aが俺を警戒しながら聞いてきた。

うーん マジでどうしようか？

出来れば穏便に事を済ませたいんだよなあ。

「さっさと答えろ！このチビ！」

ブチッ（怒）

「今なんつたこのハゲ野郎！！！！（怒）」

日向は元々身長が小さく、この事がコンプレックスだった。

更に今は幼年化してるため、『チビ』や『小さい』と言う言葉に敏感になっていた。

「少しO☆H☆A☆N☆A☆S☆I☆しようか。主に肉体言語という言葉
でなあ!!!!!!」

その言葉と同時に日向の姿が突然消えた。

そして黒服Aの目の前に姿を現した日向は

「魔神拳！飛燕連脚！獅子閃孔！ゴッドスラッシュユタイフーン！
ゴッドハンドスマーアーーーーッシュー！大雪山おろしー」

黒服 A・B・C・D・E・F を次々と薙ぎ倒していった。そして黒服達は生きる屍と化した。

日向は黒服 A. B. C. D. E. F を倒した

日向60の経験値を手に入れた

10万4500円のお金を財布から奪い取った

時計、サングラス、ネックレス指輪を剥ぎ取った

こうして日向の初戦闘は日向の勝利という形で無事に幕を閉じた。

第5話 世界は理不尽で出来ているが逆らえないのはオリジナル主人公の特権

第5話 世界は理不尽で出来ているが逆らえないのはオリジナル主人公の特権なんだよね

――拝啓 別世界に居る父さん母さん息子の日向です。

様々な出来事を得て今、俺は異世界に居ます。

何も言わずに異世界に行った事をお許し下さい。

というか伝える時間も書き置きを残す時間も、おんぼろデバイスのせいでまったく有りませんでした。

そして異世界に着いて早々、誘拐現場に出くわしてしまいました。

なんとか誘拐犯達を撃破することに成功しましたが、その後が大変でした。

なんと！？助け出した女の子達は『アリサ・バニングス』と『月村・すずか』でした。

いや、……何となく分かっていたさ。

もしかしたら違いかもしいないと思ったけど、やっぱり本物でした。

そして二人を縛ってたガムテープとロープを解いてある程度落ち着いた所でお互いの自己紹介をした。

その後二人を家に送り届ける事になりました。

アリサいわく「助けるんなら最後まで面倒見なさいよ！」と言われたからです。

……じゃ○アンだ。

この子はジ○イアンだよ。

と、まあ、そんなやり取りをしている間にすずかは月村邸に連絡を入れていた。そしてバニングス邸より近い月村邸に送ることとなったんです。

そして月村邸の前に到着

デカイ……めっちゃくちゃでかいです。豪邸ですよお母さん。

内心、初めて見る豪邸に戸惑いながらも歩いてると、門の前に誰か三人位立っているのが見えた。

向こうもこちらに気付いた様で走りながらこっちに向かって来た。

そしてすずかに似た女性が泣きながらすずかに抱き着いた。

すずかの姉の『月村・忍』さんだ。

そしてアリサの側に寄りアリサの安否を確認する執事服を着たご老体はバニングス家の執事だと思う。

そして最後に来たこの人高町家の鬼いちゃんこと『高町・恭也』さんだ。

「すずかちゃんとアリサちゃんを助けてくれ有り難う。忍に代わって礼を言うよ」

「別にたいしたことしてませんよ。たまたま運が良かっただけです」

「…………君は自分を信じてないんだね」

「つつ!?!……………」

「君にとっては小さい事かも知れないが、君は人を助けたんだ。それは価値ある力さ。だれが否定しても自分だけはそれを信じてあげないと、でないと君自信が可哀相だ」

「クッ!? 失礼します!」

俺は自分の心の中を見透かされたような感覚から逃げるようにその場を去ろうとした。

「あっ、待って」

忍さんに呼び止められた。

「……………何ですか?」

俺は少し不機嫌になりながらも聞き返した。

「あのね、日向君にお礼がしたいの」

すずかが答えてくれた。

「俺が勝手にやったことだから気にするな」

「それでもお礼がしたいの」

「いや、礼なんて「グダグダ言っていないでさっさと行くわよ!」
そうね。行きましよう♪」

アリサと忍さんに無理矢理連行された。

俺は目で恭也さんに助けを求めた。

「諦めろ。ああなった忍は俺にはどうすることもできん」

「理不尽だ!」

「あつ、そういえば自己紹介がまだだったわね、私の名前は月村忍
っていうの。よろしくね♪」

「俺の名前は高町恭也だ」

「……葵・日向です。ハア、少しは俺の話を聞いてください（涙）」

そして俺はすずかの家で夕食を御馳走になり、なし崩し的に一泊する
ことになった。

アリサもすずかの家に泊まるらしい。明日から春休みらしく元々今
日泊まる予定だったとか。

こうして日向の異世界生活の初日は月村邸で終わりを迎えた。

第6話 どの主人公もツンデレには苦勞するけどなんだかんた言っても相手を

どうもサンクスです

いつもページ数が少なくて申し訳ありません

自分の脳内妄想を文字にする事がうまくできません

まだしばらくはページ数が少ないままだと思いますがご了承下さい

第6話 どの主人公もツンデレには苦勞するけどなんだかんだ言っても相手を

第6話 どの主人公もツンデレには苦勞するけどなんだかんだ言っても相手をしてしまうのはボケに全力でツツコミをいれてくれるからかな？

〽月村邸 大食堂〽

誘拐騒動から一夜明け俺は朝食を頂いてる。

俺は朝食を食べながら、忍さん、すずか、アリサと会話していて、ふと忍さんがこんな話を持ち出した。

「ねえ日向君。もし日向君が良かったらこの家に住まない？」

やはりそうきたか。

昨日の夜夕食を食べた後ご両親に連絡なくていいのかと忍さんに聞かれ咄嗟に「俺に両親はいません」と答えてしまったからだ。

そしてイマイチよく理解出来てなさそうな顔をしていたので、忍さんに事情を説明（偽の）した。

両親を早くに亡くして唯一の家族だった妹を事故で亡くしてから両親の残した財産を使って世界中を旅していたと説明した。

説明を聞き終えて忍さんが申し訳なさそうな顔をして謝ってきた。俺は「別に気にしないでください。もう慣れましたから」と言っこの話を終わらせた。

その日はそれで終わったが、まさか次の日の朝にこのような手段に出るとは……………

俺は正直どう答えて良いか迷ってた。

どうする！どうするよ俺！

？申し出を受ける

？申し出を断る

？アリサの犬になる

？転移魔法を失敗したフリをしてプレシアの奴隷になる

よし、？だ！

って違うだろ！

明らかに違うだろ！

おかしいだろ！

何だよ奴隷って！

しかも？の犬ってなんだよ！！

…………いやマジでどうすっかな。

とっ悩んでるとあのお方がこのような事を言ってきた。

「何なら私の家でも良いわよ♪」

？か！？？なのか！？強制的に？になるのか！俺、犬になるのか！？

それはなんとか回避しなければ

「ジャイア・・・アリサ。それは丁重に遠慮しとくよ」

「ねえ、今ジャイ○ンって言おうとしたの？ねえ、そんな事を言うのはこの口か！この口か！」

「ごふえんなしゃい、ごふえんなしゃいっ」

俺はおもいつきりアリサに頬っぺたをひっぱわれた。

「全く、こんな可愛い子捕まえといてよくそんな事言えるわね」

自分で自分を可愛いと言うのはどうかと思ったが後が怖いので言うのを止めた。

まあ話が反れてしまったがどうしようか？

正直、この家に住むメリットは原作に絡み易く情報収集がしやすいという事にある。

そしてデメリットが行動範囲が限定されて裏で準備がしにくいという事にある。

これは本当に面倒だなあ。

「あー！、もう！じれったいわねえ！男ならズバツと決めなさいよ！」

この子は本当に短気だ。ぶちギレ姫だ。

うーん。このままじゃ何時まで経っても決まらないし……………ここは思い切ってズバツと決めるか！

「忍さんやすずかがいいなら、このままお世話になります」

「うん！大歓迎だよ」

すずかが嬉しそうに答えた。

「私も大歓迎よ♪」

忍さんも嬉しそうに言った。

何故かアリサは残念そうな顔をしてた。

不思議に思いどうしたのか聞いてみたが「うるさいわね！このバカ犬！」と怒鳴られてしまった。

俺はなんでアリサが怒ってるのかよく解らなかった。

とにかく、こうして俺は晴れて月村家の一員となった。

番外編 間違いだらけの未来※かなりキャラ崩壊注意（前書き）

今回は番外編ということで前回の？と？を選んだらどうなるか？というのをノリと勢いでやってしまいました

正直いって本当に申し訳ありません今回の話は信じられない位キャラ崩壊しまくってます

主人公を始めアリサ、プレシアフェイトが相当キャラ崩壊しまくってます

フェイト、アリサ、プレシア ファンの皆様本当に申し訳ありません

自分で書いててかなり鈍引きしました

もしそれでも良い方は遠慮無く見ていって下さい

番外編 間違いだらけの未来※かなりキャラ崩壊注意

第6話で？を選んだ場合

バニングス家 廊下

俺は最終的にアリサの家を選んだ

正直何故アリサの家を選んだか自分でもよく解らない
強いて言うなら世界の修正力だろうか？

今俺はアリサにこれから俺が住む部屋に案内すると言われアリサの後についていつてるが何か妙な違和感を感じる

「なあ、アリサ何かどんどん屋敷から遠ざかってないか」

「気のせいよ」

そして屋敷の奥の一階から下に降りる階段に差し掛かった

「この下よ」

そう言われ俺はアリサの後についていつて階段を降りた

そして階段を降りきると目の前に鉄でできた丈夫そうなドアが現れた

そしてアリサがドアを開くとそこには一面石で出来た部屋が広がっていた俺は驚きながらも中を見渡すように部屋に入った

「ナンだよこの部屋はあ」

バタンツツ

突如部屋のドアが閉まった

「な、何だ!!!」

俺は驚きながらも音のしたドアの方に顔を向けた

「フフフ・・・」

そこにはよく顔が見えないが何故か笑ってるアリサがいた

「ア・・・アリサ？」

俺は何故か様子がおかしいアリサに内心ビビりながらももう一度名前を呼んでみた

「どうしたんだよ、アリサ？」

「フフフ、・・・これでやっと二人っきりね」

「あ、ああそうだな」

「フフフ・・・あのね日向、この部屋ね、内側からじゃ開かないよ

うになってるの」

・・・え？

「フフフ・・・よく解らないって顔してるわね、もう一度言うわよ」

「この部屋は、内側からじゃ開かないのよ」

「なっ、どういう事だよ！アリサ！」

「フフフ・・・どうもこうも無いわ、これで私達はずっと二人っきりでいられるんだから」

「なんでこんな事をするんだ？」

「フフフ・・・なんで？そんなの決まってるじゃない、アンタが私の事を見ないでするかばっかり見てたからよ」

「そんな事無いぞ、俺はちゃんとアリサの事も見てたぞ」

「嘘だっ！！！！！！！」

「いや、嘘ってアリサ」

「これでアンタは私だけを見てくれる」

「いや、まあ確かにそうだけどさあ」

「ちなみに外からの助けを待たたって無駄よ

此処は立入禁止区域だから屋敷の人間は誰も此処を通らないわ」

マジですか！

この部屋食べ物とか無いんですけど

「アンタが居れば他に何も要らないもの」

マ・・・マジでえ！！！！

「フフフ・・・さあ、残りの人生私と二人っきりで過ごしましょう」

こうして俺の冒険はアリサと共に幕を閉じてしまった

B a d E n d

第6話で？を選んだ場合

時の庭園

バシィッ ピシィッ

ある一室に鞭の音が響き渡る

ビシィッ バシィッ

「ご主人様 あ、もっとその鞭でこの豚を叩いて下さいっ」

「ほんとうるさい豚ねえ、豚が人の言葉を喋るんじゃないわよ豚は

豚らしくブヒブヒ言ってなさいよ」

バシィッ

「ブ、ブヒィ（はいっ、ご主人あ）」

日向は完全にプレシアに調教されてた

「ブヒィ（ご主人様あ、もつと〜）」

そんな様子を影から観ている二人の姿があった

フェイトとアルフである

フェイトは何か複雑そうな顔をしてアルフは同情の視線を日向に向けていた

そして遂にフェイトが何かを決心し行動に移した

アルフは止めようとしたがアルフの静止を振り切りフェイトはこんな事を言い出した

「母さん、私もその鞭で叩いてえ」

「ちょっと、いきなり何を言い出すんだいフェイト!!」

すかさずアルフがツツコミを入れる

「フフフ・・・こっちにいらっしやいフェイトそこの豚と一緒に面倒を観てあげるわ」

プレシアはやる気満々である

「うん、母さん」

フェイトもやる気満々である

もはやアルフではこの状況は止められなかった

「ほら、もっといい声で鳴きなさい!!」

バシィッ ペシィン パチィン

「ああ、良いよお母さ〜ん」
ビシィッ バシィッ

「ブヒィブヒィ（最高です〜！ご主人様〜）」

そしてプレシアとフェイトはジュエルシード集めをせずに永遠と同じ日々の繰り返しでした

こうして俺とプレシアとフェイトの物語は幕を閉じた

B a d E n d ?

番外編 間違いだらけの未来※かなりキャラ崩壊注意（後書き）

まず始めに本っ当に申し訳ありませんでした

今回の話は軽いBatEndの話のはずだったんですが何故かあ
なっていました

今回の話で気分を悪くされた方々深くお詫び申し上げます

※今回のBatEndシリーズの人氣が無かった場合はこれでB
atEndシリーズは終了となります

第7話 見え始めた世界の一端とお買い物へ行こう 準備編（前書き）

どうもサンクスです

前回のダメージがまだ残ってます

これからはもうノリと勢いで書かないと堅く決意しました

誤字についてのお詫びと修正

第2話でパラレルワールドがパネルになっていました

番外編でBadEndがBatEndになっていましたで深くお詫び申し上げます

後日まとめて修正したいと思います

第7話 見え始めた世界の一端とお買い物へ行こう 準備編

第7話 見え始めた世界の一端とお買い物へ行こう 準備編

く朝食後 客間にてく

その後、俺は忍さんに頼み歴史の教科書や新聞、パソコン等を使って自分の世界との違いを調べている。

そうして漁って観ると、自分が異世界に居るのだと改めて思い知らされる。

一番目につくのは『神界』と『魔界』である。

これでこの世界は『シャッフル』も混ざっていると判明した。

まあ、シャッフルに付いてはしばらく関わらないだろうと判断し当面保留という形にした。

そしてもう一つ、新聞を観ていてある一面が目に入った。

『枯れない桜の木、海鳴市に再び現る』

俺はこの一面を食い入る様に見た。

なんでも50年位前にこの海鳴市で一年中桜が枯れずに咲いていた時期があったらしくそれが突如桜が枯れてしまったそうだ。

枯れた原因は今だに説明されておらず一年中咲いてた原因も今だに説明されていない。

そして今から二年位前に突如再び桜が咲き始めた様だ。

「D・CとD・C?かよ」

しかも初音島じゃなくて海鳴市かよ!

ちよっと都合良すぎじゃありませんか?

まあ、有るものは仕方ないしそこら辺は割り切った。

今は桜の暴走もなさそうなのでこれも当面差し当たった問題でも無いからこれも保留とした。

となると当面の問題は『P・T事件』と『闇の書事件』か。

出来れば『フェイト』と『はやて』は管理局に入れたくないんだよなあ。

何か良い方法無いかなあ。

ドタドタドタドタドタ

ボタン

「日向ー！　今ヒマ？　って言うかヒマよね」

この声により俺の思考は一時停止した。

この声は、アリサか。

「ああ、ヒマだけど何か用か？」

もはやノックをしろとか廊下を走るなどは彼女に言っても無駄なんだろうなあ。

「買い物に行くわよ！」

「買い物？」

「そうよ、買い物よアンタ日用品、何も持っていないんでしょう？」

そういえばそうだった！

俺何も持ってないんだ！

「というわけで、買い物に行くわよ！、因みにアンタには拒否権なんてないから。『はい』、か、『YES』、で答えなさい！」

拒否権無いのかよ！　まあ、断るつもりは無いけどさ。

「はいはい、わかりましたよ」

「なんか刺があるけど、まあいいわ。あ、そうそう後、アタシとす
ずかの友達も一緒に買い物することになったから」

エッ？それって……………

「・・・なっ！？な、なんだってええ——————！！！！！！！！」

こうして俺はアリサ達と買い物に行くことになった。

第7話 見え始めた世界の一端とお買い物へ行こう 準備編（後書き）

ようやく次の話であの人が登場です

ここまで来るのに随分と掛かりました

次回も頑張って書かせていただきますので応援よろしくお願いします

第8話 小さな出会いとお買い物へ行こう 小さな魔王とフレンドになりました

どうも作者のサンクスです。

ページ数が少なくて本当に申し訳ありません。

ケータイで投稿すると、どうしても長く書けませんねえ。いやあマジで困った。誰かケータイでも長く小説を書けるコツとかがあるなら本気で教えて欲しいです。

※7／6 若干セリフを修正しました。

※7／6 台本形式を修正して前回までのセリフの前に名前が無い状態に戻しました。

台本形式は本当に不評でした。だから修正しました。

第8話 小さな出会いとお買い物へ行こう 小さな魔王とフレンドになりました

第8話 小さな出会いとお買い物へ行こう 小さな魔王とフレンドになりました♪

く海鳴市のとあるデパートの入り口にてく

俺とアリサとすずかは海鳴市にあるデパートの入口で一人の少女を待っていた。

「遅いわねえ。なのは」

アリサは腕組みしながらイライラしていた。

「仕方がないよ。さっき連絡したばかりだし」

すずかはイラつくアリサを宥める。

「それならば仕方がない。女の子の支度は時間がかかるもんだらう？」

「まあ、そうだけどお」

「なら、多少の遅れは目をつぶって」「アリサちゃん。すずかちゃん！」

俺がアリサを諭してると遠くからアリサの名を呼ぶ声が聞こえてきた。

「どうやら来たようだな」

遠目から見てアリサとすずかと同じくらいの身長の子が走って
こっちに向かって走っていた。

「遅くなってごめーん」

「まあいいわ。こっちが急に呼び出したんだし」

「ゴメンねなのはちゃん。急に呼び出したりして」

「にやはは。そんないいよ。私もヒマだったし」

「そう、それじゃあさっさと行きましょう」

「うん♪」

「ア、アリサちゃん。日向君の事を紹介しないと!」

危うく空気になる所だった。サンキューすずか♪

「あゝ。すっかり忘れてたわ」

さっきまで話してただろうが!!!

「そ、それはいくらなんでもあんまりだよ。アリサちゃん」

「別にいいのよ、こんな奴!」

「えーっと、その男の子が昨日メールで言ってた」

「そう、日向よ」

どうやらすでに俺の事は知られているらしい。

「葵・日向だ。一応昨日からすずかの家に居候している」

「あっ、私はアリサちゃんとすずかちゃんの友達の『高町・なのは』です。よろしくね日向君♪」

ああ、よろしく頼むなのは」

「うんよろしくね日向君♪」

「それじゃあ今度こそ行きましょう」

そう言いアリサはズンズンと先を歩いていった。

そして俺達はデパートの中を色々観て回った。

数時間後

「大体こんなもんか？」

「そうね。……大体こんなもんね」

俺達はある程度必要な日用品を買いデパートの屋上のテラスで休憩

していた。

「そういえば日向君って携帯電話って持ってるの？」

さすがが唐突に切り出す。

「えっ？」

そういえば持っていないなあ。俺の元居た世界の俺の部屋に置きっぱなしだった気がする。

「……いや、持っていないな」

「それじゃあ、買いに行こう♪」

「そうね、買いに行きましょう」

「いや、携帯電話なんて必要か？」

「「必要だよ（よ）！！！！！！」」

「そ、そうですか」

余りの迫力に日向は押し黙った。

こうして俺達は携帯電話を買いに行くことになった。

携帯ショップ

「これなんて良くない？」

「こっちも中々・・・」

「これも・・・」

買う本人を無視してヒートアップ中です。

「こっちの方が・・・」

「それよりも・・・」

「えー、やっぱりこっちが・・・」

まだしばらく掛かりそうだ。

「少し店内を観て回るか」

俺は店内を観て回る事にした。

「最近の携帯は色んな機能があるんだなあ」

年寄り臭い発言だ。

「うるさい！！、まったく、ン、これは・・・」

なにやら見つけたようだ。

「俺が前使ってたのと同じ奴か？」

どうやらこの世界に来るまでに使ってた携帯と同じ形を見つけた

ようだ

「…若干性能は良くなってるけど、基本操作は一緒か」

日向は携帯本体とパンフレットを交互に見ながら前の携帯との違いを確かめてた。

「ふむ、これくらいの違いなら………うん♪よし、コレにするか」
どうやら決まったようだ。

「さて、決まったし、さっさと済ませるか」

そして日向は店員の元に行きアッサリと携帯電話を購入した。

「さてと、アリサ達は……」

「だから、コレの方が……」

「やっぱりこっちが……」

「それよりもアレの方が……」

まだ揉めていた。

「はあ、……まだやってたのか」

このままじゃきりが無いので日向は止めに入った。

数分後

「なんでアタシに何も言わずに決めちゃうのよ！」

アリサは勝手に携帯を決めた日向に怒っていた

「いや、だってお前等に任せてたら何時までも決まらないだろう？」

「うっ」

アリサは核心を突かれ動揺する。

「確かに」

すずかは冷静に頷く。

「ごめんね、日向君」

なのはは素直に謝った。

流石のアリサもこれには言い返せない

「ま、まあいいわ。それよりも、早くアンタの番号とアドレスを教えなさいよ」

「あ、私にも教えて」

「私も、日向君」

「ああ、ちょっとまってくれ」

取り合えず番号とアドレスを教える事で一先ずまるく収まった。

デパートの入り口

「取り合えずこんなもんか？」

「そうね、大体必要な物は買ったし他に必要な物があればまた買いに行けばいいし」

「うん、そうだね」

アリサとすずかも日向の言葉に頷いた。

「それじゃあ今日はもう帰るか」

「うん、それじゃまたね、アリサちゃん、すずかちゃん、日向君」

なのはは手を振りながら俺達と反対方向へと歩いて行った。

「またね、なのは」

「またね、なのはちゃん」

今日は世話になったな、なのはのおかげでとても有意義な一日になったよ、有り難う」

「ううん、私もとっても楽しかったよ。それじゃあバイバイ！」

「ああ、またな」

なのはを見送り俺達も帰路についた

「それじゃ、アタシの家コッチだから」

「ああ、またな、アリサ」

「またねアリサちゃん」

アリサとも別れ俺達は月村家に帰った

月村家 玄関

「ただいまぁ♪」

「お邪魔しますします」

「もう、違うよ！日向君」

すずかは人差し指を立てながら俺に注意する。

「・・・そうだったな♪ただいま。すずか」

「うん♪おかえりなさい。日向君♪」

こうして俺と高町なのはは出会い冒険に新たな1ページを刻んだ。

第9話 使い魔誕生 前編

第9話 使い魔誕生 前編

○月○日

〽日向の部屋にて〽

日向は床に何か魔法陣の様な物を描いている。

「えーっと確か、エボルトの記憶だここはこうでそこはこんな感じかだったよな？」

前世とエボルトの記憶を使って何かやろうとしてるらしい

「…………よし！出来た！」

どうやら完成したようである。

「これでようやく俺にも使い方魔ができるぞ！」

どうやら使い方魔を創るらしい。

「やっぱりカッコイイのが良いよなあ。こう、何て言うか、ドラゴンとかライオンとかユニコーンとか！」

よほど嬉しいのか日向はかなり舞い上がっていた。

「つと、いけない、いけない。ついつい妄想の世界に浸ってしまっ
たぜ」

かなりご満悦である。

「さて、それじゃあ使い方魔を創りますか」

「出ろお！俺に相応しい使い方魔ああああ！！！！！！」

簡単だ！！！？かなり簡単だよ！？

そんなんでいいのか！おい！

ピッカアアーーーーー！！！！！！！！！！

突如、部屋中がまばゆい明かりに包まれた。

「うっ、眩しい、せ、成功か？」

部屋中を包んでた光も治まってきた。

（一体どんなカッコイイ使い方魔なんだろうなあ♪）

思い思いに日向は魔法陣の方を見た。

「……………ツツ！！！？なっ！、な、なんだ！これは！！！？」

日向が見たものは一体なんだったのか？

後半へ続く

第10話 使い魔誕生 後編

第10話 使い魔誕生 後編

「なっ！？な、なんだこれは！？」

「ピヨッ、ピピ、ピヨ？（お前か。俺の主は？）」

「えっ？」

日向の前に現れたのはドラゴンでもライオンでもユニコーンでもなく、ただの………ヒヨコだった。

「ピピ、ピヨヨ、ピ！（俺の主はお前かって聞いてるんだよ！）」

「ええーっと、……そのお……（ヒヨコ！？あれ？ヒヨコか？ヒヨコなのか！？？）」

「ピヨピヨヨピー！！（そうなのかそうじゃないのかハッキリしろー！！）」

「はっ、はい！そうです。俺が貴方の主です！」

日向は余りのヒヨコの迫力と自分の予想を裏切られたショックで冷静さを失っていた。

「ピピピヨォ、ピピピ（そうか、なら俺に名前を付けろ）」

「な、名前ですか？」

「ピヨピピ、ピヨ（そうだ名前だ）」

「名前かあ、……それじゃあ、エレクトロニクスグレートアルティメットサンダーバードで！」

ながっ！！？

めっちゃくや長いわ！！書くの大変じゃないか！！

「ピヨ、ピピピヨヨ！（長い、もう少し短くしろ！）」

「そうかあ、………それじゃあ、ヒヨコ君でお願いします」

「……ピヨピピピ（……まあいいだろう）」

えっ！、いいの！？そんな適当なのでいいの？っていうか見た目そのままじゃん！？

「それじゃあ、これからよろしくな。ヒヨコ君♪」

「ピヨピピ、ピヨヨヨピ（これからよろしく頼むぞ、我が主日向）」

これが生涯、世界最高のコンビになる俺とヒヨコ君の最初の出会いであり世界を巻き込む大きな冒険の始まりでもあった……………

番外編 日向の異世界日記? (前書き)

どうもサンクスです

今回の話はサンクスの身に起きた実際の出来事を参考に書かれています

過度な期待をしないで下さい

番外編 日向の異世界日記？

○月○日 晴れ

この日俺は人生最大のピンチを迎えていた。

「いっぱい有るから遠慮なく飲んでね♪」

「なっ！？こっ、コレは!!！？」

今、俺の目の前には大量の………ペ○シしそ味’が置いてあった。

なんでも新商品として発売されたく試しにファリンさんが大量に買って来たがらしいが既に俺の世界では発売されていてコイツの味はよく知っている

「へーえ、結構綺麗な色してるじゃない」

何も知らない忍さんは率直な感想を言う。

「どんな味なんだろう？」

すずかは興味津々である。

「まあ、普通の味なんじゃない？」

アリサは普通の感想です。

「美味しそ〜」

バカっぽい感想ですよなのはさん。

「取り合えず飲んでみるか」

俺は飲みたくないです恭也さん。

そして俺以外の皆が飲み始めた

ゴクゴクゴクゴク

「「「「ブッーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!」」」」

「「「「マズッ!!!!!!!!!!」」」」

「なッ、何よ? この味は!!」

「ありえないよこの味は」

「すごくキモチワルイよ〜」

「……………なんとも言い難い味だ」

「流石にコレはね……………」

いや皆さん予想道理のリアクションをしてくれました♪俺も初めて飲んだ時は同じようなリアクションをとったっけ。懐かしいな。い

い思い出では無かったが…………

「それにしても、……………コレどうします?」

コレとはテーブルの上に置かれた大量のペ○シしそ味

「「「「「……………」」」」」

その後、結果的に言う大量のペ○シしそ味は月村家の倉庫に厳重保管となった。

そして俺は試しにアイツに一本送ってみることにした。

管理局本局のとある執務管の部屋

「ん?これは・・・日向から?…………ペ○シしそ味?まあ、取り合えず飲んでみるか」

ゴクゴクゴク

「グハァッ!!!!!!?」

こうして人知れずとある執務管が尊い犠牲となった

番外編 日向の異世界日記? (後書き)

どうでしたか皆さん

自分としてはこのシリーズ続けたいなーと思ったりしています

第2第3シリーズでこのキャラを使ってやってほしい等の感想があればどしどしと送って下さい

感想お待ちしております

第11話 もう一つの始まり

第11話 もう一つの始まり

○月○日 晴れ

今日はすずかの付き添いで図書館に来ていた。

なんでも読書感想文を書く為の本を探らしく俺も適当に歴史を漁る為にすずかに付いて行った。

「読む本探してくるから」とすずかとは別行動になった。取り合えず俺は歴史関連の本を探すことにした。

「ふむ、昔の歴史は差ほど変わらないか・・・」

大体おおまかな情報は入力したので俺の用事は済んだ。

「取り合えずこっちの用事は済んだしすずかと合流するか、えーつとすずかは・・・」

すずかを探す為に図書館を歩き回った。

「おっ、居た、すず・・・か？、隣に居るのは？」

すずかを見つけたが隣に知らない車椅子に乗った女の子が居た。

「あ、日向君、もう用事は済んだの？」

すずかもこっちに気づいた様で俺に声をかける。

「あ、ああ、あらかた片付いたよ。それよりも、隣にいる子は友達か？」

俺はすずかの隣にいる女の子に何となく目星が付いていたが一応初対面なので聞いてみた。

「うん♪さっき知り合ってお友達になったの」

「はじめまして、八神はやて、といいます」

「はじめまして。俺は葵日向だ。見たところ同じ年ぐらいか？」

「そやね。さっき、すずかちゃんと話したけど同じ年やよ」

等とたわいもない話をしながら日向は頭の中でこれからの事を考えてた。

（まさかこんなに早くはやてに会うとは！……しかも原作よりもすずかと出会うのが早い……これは少々作戦の見直しが必要か？ いや！このままで………）

「日……く……ん……」

「……………」

「日・向・君」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「日向君？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「日向君！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・んっ！！どうしたはやて？」

「どうしたやあらへんよ！さっきからずっと呼んどるのに返事せえへんから！」

「あ、ああ。すまない。少々考え事をしてな。それよりも何か用か？」

「うん。そろそろ帰るからって言おうとしたんやけど、全然返事せえへんから・・・・」

「それはすまないことをした。ごめんなはやて」

「別に気にせんでええよ。ほな、もう行くからまたな日向君」

「ああ、またな。はやて」

そして俺らははやてと別れを告げた。

「それじゃあ私たちも帰ろっか」

「そうだな帰るか、すずか」

「うん♪」

そして帰る途中俺らは偶然にもまた誘拐現場に立ち会わせた。

「またかよ!」

しかもよく見たらこの前の誘拐犯じゃないか!

「また、アイツ等か。………そういえば警察に連絡してなかったな?」

「オラァ! さっさと乗り込め!!!!」

……とりあえず殺るか♪

「テメーら! これでも喰らえ!! スーパー稲妻キイイクウウウウウウウウウウウウツ!!!!!!?」

「な!!?」

ズゴオオオオン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「ウワァァァー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

「…悪は滅した!」

日向は誘拐犯を倒した

経験値を50手に入れた

1万円を奪い取った

日向はレベルが上がった

攻撃力が3上がった

防御力が2上がった

素早さが4上がった

かしこさが15上がった

日向はライダーキックをおぼえた

こうして俺は誘拐犯をこらしめる事に成功した。

「とりあえずコイツ等を警察に引き渡すか」

そう言い携帯を使い警察に通報した

「さて、後は警察が来るのを待つだけだ」

「あの」

捕われてた少女が話し掛けた。

「ん？」

「助けてくれてありがとうっす♪」

「いや、気にするな、助けたのは気まぐれだし運が良かったただけだ」

「それでも助けてくれたのは事実なんだから、胸を張っていいんだよ」

「そうだよ日向君」

すずかが少女のフォローに入る。

「うっ、なんか苦手なんだよな、自信を持ったり自慢したりするのって」

「なんかもったいないっすね……あっ！　そういえば自己紹介がまだだったっスね、私の名前は、'リシアンサス'、っす。長いからシアって呼んでほしいっす」

「ああ、俺は葵日向だよろしくなシア」

「私は月村すずか、よろしくねシアちゃん」

警察が来るまで俺らは自己紹介をしてから軽くお互いの話をしながら時間を潰した。

それから数分後

ようやく警察が来て誘拐犯達を連行していった

？「シアアアーーーーーッ！……！！！！！！！！！！」

「ん？」

……………この声は、まさか……………

「あっ！お父さん！」

やっぱりそうだ間違い無い神王だ。

「シア無事だったか？」

「うん、日向君が守ってくれたから」

「そうか！そいつはすまねえことをした。改めて礼を言うぜ！」

「いえ、そんなたいしたことしてませんよ」

「んな謙遜すんな。おめえさんは立派な事をしたんだ。それに誰にでもできることじゃねえよ。もっと自信を持って」
やっぱり豪快な人だ。

「出来るかぎり努力してみます」

「おう！男はそうでなくっちゃな。っと、そういえばまだ名乗って無かったな。俺はシアの父親でユーストマだ。ついでに神王もやっている」

神王はついでかよ！

「なんか今、すごい言葉が聞こえたんだけど？」

それは気のせいじゃないぞすずか。

「俺の名前は葵日向。一応すずかの家に居候している」

「月村すずかです」

「日向殿にすずか殿だな、よし、それじゃさっそく礼もかねてこれから神界で宴だ！」

……………はい？

「いや、そんないいですよ（かったるいからマジでやめてくれないかな）」

「んな遠慮なんてなくていいぞ！」

いや遠慮なんて全然してませんからむしろ迷惑だから！

「それじゃあ行くぞ日向殿！」

「えっ？あの、いや！ちょっと!？」

「頑張ってね日向君」

いや、まてよ！俺だけかよ!？お前も来いよすずか！

「お姉ちゃんにはちゃんと言っておくから」

退路無しかよ。

「宴だ——————!!!!!!」

「なんで俺の周りの人間は人の話を全く聞かないんだ！（泣）」

……………こうして俺はなし崩し的に無理矢理神界に行くことになってしまった。

第12話 人生楽ありや苦もあるさ

第12話 人生楽ありや苦もあるさ

こんにちは日向です。

神王に連れて来られてから数日が過ぎました。来て早々の宴は凄かったです。俺子供なのにお酒一杯飲まされました。当然次の日二日酔いになりました。

「日向殿いるかー？」

神王が何時もより少し小さめの声で客室に居る俺を呼ん。だ。

「はい。いますよーって、どうしたんですか？なんか少し元気が無いようですけど？」

よく見るとなんか疲れたようなそれでいてうつ病のような顔をしていた。

「いや、実はな――――――――――」

神王の話を聞くと、なんでも神界で最近権力を使って裏で色々暗躍している政治家がいるらしく、中々証拠も掴めず困り果ているようだ。

「…………ふむ、やっぱりどこにでもいるんだねえ。そういうのって……………」

「まあ、今までもそういう事は何度も在ったんだが今回はどうい

訳か上手くカモフラージュされてて裏がとれねえ」

神王は頭を掻きながらげんなりした表情だった。

「うん、多分……他にも協力者がいて、上手いことやってんだろかねえ」

俺は思った事を言う。

「多分そうだろうなあ。俺も独自で調査してみたが、どうも胡散臭い企業が絡んでるようだからな」

「……そうなる結構厄介だな。多分直接裏で動いてるのはその企業で間接的にその政治家が指示を出してるだけだろうから、その証拠が無いと自分は関与してませんその企業が勝手にやった事ですって言い逃れる可能性が有るだろうし」

本当によく出来たやり方だ。

「そうなんだよ。そこが問題なんだ！」

神王もどうやら俺と同じ考えのようだ。

「そうなる……やっぱりアレしかないかな？」

「日向殿！何か良い方法でも有るのか！」

神王は俺の両肩を掴んでブンブン揺らした。

「ま、まあ、有るっちゃ有るんだけど………」

「有るんだったらなんでも良い！教えてくれ日向殿！」

「まあ、良いけど」

「恩に着るぜ日向殿。でどんな方法があるんでえ」

「ずっと昔から有る悪人の裁きかただよ」

俺はニヤリと腹黒い笑みを浮かべながら言う。

「はぁ？？？」

神王は訳が分からないって顔だった。

「それはね・・・ゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョ」

俺は神王に耳打ちしながら分かりやすく説明する。

「ふむふむ、ほお！」

「それで・・・ゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョ」

「おお！？そんな方法が在ったのか！」

「割と日本じゃ昔から有るポピュラーな事なだけだね」

「中々面白そうじゃねえか！」

「でしょう♪それじゃあ俺は見本になるDVD買って来るからさつき言った準備しといて」

「おう！任せとけ！そっちも頼んだぜ」

「ああ、了解だ♪」

こうして俺と神王による悪徳政治家退治が始まった。

数日後

現在俺は悪徳政治家と悪徳企業の悪事を暴くため忍者よろしくと言わんばりに密会場所の天井裏で盗み聞きしてます。

「うむ。して、今度はどのようにするんだ？」

「今回はこのようにして・・・」

なるほど。毎回パターンを変えてるのか。道理で尻尾を掴めない訳だ。

日しかし、まさかと言うかやっぱりと言うかこんな場所で密会をしていたとは」

今俺らの居る場所は神界の高級料亭である。

「ベタだなあ、もう呆れて何も言えないよ。って言うかなんで神界の諜報員はこんな簡単な事出来ないんだ？」

俺は此処に居ない神界の諜報員に愚痴を漏らしつつ話の内容をしっかりと録音していた。

「では今回も頼んだぞ」

「はい、おおせ付かりました」

どうやら話は終わったようだ。

「……とりあえず戻って神王と今後の打ち合わせでもするか」

俺はやることを済まし神王の所に戻った。

「おっ、戻ったな日向殿」

「お帰り。ヒナちゃん」

「ただいま。神王、……魔王なんで居る？ 後、ちゃん付けで呼ぶな魔王！」

「つれないなあ、ヒナちゃん。魔王だなんて他人行儀なんだから」

他人行儀って初対面だろうが！ しかも直す気ねえな。

「俺とは初対面のはずだが…何で名前を知っているんだ？」

「なんでって、それは神ちゃんから聞いたからだよ。面白い子と友達になったって言ってたから、だからどんな子か気になって会いに来ただけど、そしたら何やら面白そうな事してたから手伝うこと

にしたんだ」

「……まあ、大体の事情は解ったが、とりあえずちゃん付けは止めろ（コイツ等やる気あるのか）」

「ええー！ー！ー！ーっ！、似合ってるからいいじゃないかヒナちゃん」

「似合ってるとかそんなのどうだって良いから止めろ！（屈辱的なんだよ!）」

「んまあ、それは置いといて、どうだってんでえ日向殿」

神王はこのままだと話が進まないと思って俺達の間に入って話を変えた。

「ん？ああ、こっちはバッチリ裏が取れたよ」

「そうか！そいつはありがてえ！」

「やるねえヒナちゃん」

「まあ、とりあえず必要な事はやったし後は……………アレだけだな」
♪

「おう！アレはもうバッチリだぜ」

神王は親指を立てながらナイスなスマイルで答えた。

「って事は向こうはボロを出した訳か」

「ああ、それについては完璧だ！」

「なまじ権力を持ってるから多少の事は揉み消せると思ったんだろ
うがそれが命取りだ」

「そうだね、ホント面白い位に上手く行き過ぎてるよ」

「それじゃあ」

「残すところは」

「最終段階だけだな」

こうして俺らの計画は最終段階に入った。

数日後

神界の高級料亭前

今俺達は計画の最後を絞める為に神界の高級料亭の前に居た。

「俺の調べた情報によれば此処で決行前の最後の打ち合わせをする
らしい」

俺は調べた最新の情報を神王と魔王に伝える。

「なら、ここで押さえちまうか」

神王は手の平をバンと叩きながら気合いを入れた。

「そうだね。後は懲らしめるだけだし」

魔王は腕を組みながら魔力を高める。

「ああ、このまま殴り込んで終わらす」

俺はバットに鉋のひぐらし二刀流だった。

俺達は最初から殺る気MAXだった。

「それじゃ行くか！」

「「おう!!」」

俺達はそのまま高級料亭に殴り込んだ。

客間

「では、今回も頼んだぞ」

「はい、お任せ下さい」

「ウオラアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ズドーーーーー!!!

俺は全力で障子を蹴り飛ばした。

「な、何奴！」

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えとけ！」

「お前達の悪行しかと見せて貰ったぜ」

「証拠も押さえたし言い逃れは出来ないよ」

「なっ！？お前らはこの前雇った傭兵ではないか！」

そう俺は神王に変装してもらって企業の方に潜入捜査を頼んでいた。

「おのれえ！、傭兵風情が出過ぎた真似を！」

「私達の関係を知られたからには、お前達は此処で死んでもらう。野郎共！コイツ等を生かして帰すな！」

企業者がそう言うのと隣の部屋からゾロゾロと雑魚共が出て来た。

「仕方ねえ。マー坊、日向殿。ちっとばかりコイツ等を懲らしめるか」

「ああ、その方がいいだろうな」

「元よりそのつもりだよ！」

「傭兵風情が舐めんじゃねえ！！！」

雑魚Aがお決まりのセリフは吐いてこっちに向かってきた

「黙れクズが！二重の極み！」

「グハア！」

俺は一撃で雑魚Aをぶっ飛ばした。

「デメエやりやがったな！」

今度は雑魚Bが突っ込んできた。

「こっちも忘れてもらっちゃ困るね」

「グハアッ」

雑魚Bは魔王の攻撃をくらい倒された。

「お前達何をやっている！相手はたったの三人だぞ！！！！」

悪徳政治家は雑魚がやられる姿を見て焦りだした。

「ウオラアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

神王が拳一つで大量の雑魚共を吹き飛ばした。

「うわああああああああ！！？」

神王が雑魚共をまとめて蹴散らす。

「大体こんなもんで良いだろう」

「そうだね、ヒナちゃん」

「ああ、静まれ、静まれえ！、この紋所が目に入らぬか！」

「なっ！そ、それは神王家の！？」

「こちらにおわすお方をどなたと心得る、畏れ多くもこの国の王ユーストマであらせられるぞ！」

「なっ、なんだと！」

「一同、神王の御前である、頭が高い！控えおろう！」

「「「「「ははあーっ！」「」「」「」」

「政治家’ガイズト’並び共犯者一同！、お前等の悪事しかと見届けたぞ！なにか言い逃れはあるか」

ガイズトって名前だったのか初めて知ったよ

「くっ！……ありません」

「お前等の悪事の数々大変許しがたい行為だ、それ相応の処罰を言い渡すから覚悟しとけよ！」

「「「「「ははあーっ」「」「」「」」

こうして俺らのガイズト退治はめでたく終わった。

オマケ

「いやーアレは癖になるね、今度魔界でやらないかい？」
魔王が唐突になにやら言っています。

「おっ、いいんじゃないか」

「えっ？またやるの？」

「面白いからいいじゃねえか日向殿」

「いやまあ、そうだけど」

「そうと決まれば善は急げだ、マー坊、日向殿、行くぜ！」

「うん楽しみだねえ♪」

「い、今から行くのかあ？」

「おうよ、思い立ったら吉日って言うじゃないか」

「いや、まあそうだけど・・・」

「それじゃ行こうか」

「おう！」

「マ、マジですか……ああ！！？」

この日を境に神界と魔界での犯罪者の逮捕率が急激に伸びたと誰かが言っていた。そして俺は帰りが遅くなる連絡を忍さんにしたら受話器の向こう側からアリサとすずかのどす黒いオーラを感じた………帰ったら俺は死ぬかもしれないな。

第13話 新たなる出会い

第13話 新たなる出会い

現在、魔王の城の娯楽スペース

こんにちは日向です。

前回の話からもう数ヶ月過ぎてしまいました。

いやー、あの後魔界に行ったり、神界に行ったり、裏シアに会ったり、ネリネに会ったり、リコリスに会ったり、プリムラと遊んだり、色々あったんですよ。

まあ、省きますが本当に色々あったんですよ。裏シアにキキョウって名前を付けてあげたり、神王を説得したり、神界の偉い奴らを脅し……説得したり、ネリネの病弱な体を治したり、プリムラを妹にしたり、神界に戸籍を作ったり、省きますけど本当に色々あったんですよ。

いやー、本当に色々在ったな。頑張ったよ俺。

「……あるじ……」

「ん？……誰かなんか言った？」

なんか声が聞こえたような………幻聴か？

「主。お久しぶりです」

どうやら幻聴ではないようだ。ハッキリ聞こえるし。

「ん？・・・念話？ではないか・・・」

「あ、主？」

アレ？・・・ええつと・・・

「どちら様でしたっけ？」

「ああ！？あ、あるじいいー！ー！ー！ー！いつ！？」

魔王の城全体に響き渡る程の大きな叫び声だった。

・・・・・・数分後

「・・・ああ！そうだ！エボルトだ！ゴメン、すっかり忘れてたよ
♪」

「ひ、酷いです主いゝゝ」

「いやゝゴメン！存在そのものを忘れてたよ♪」

「酷い！？酷すぎる！！」

デバイスなのに弄りがい満点だな♪

「いやーゴメンゴメン。で、どうしたんだよ急に現れて？」

「うううう！、ハッ！？そうでした！主！もうP・T事件始まっていますよ」

P・T事件・・・ええっと・・・プレシア・テッサロッサ事件・
・無印・・・リリ狩る・・・マジ狩る・・・

「えっ？・・・なんだってー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！」

すごいカミングアウトだな。っておい！？

「いや、だからもう始まっていますって」

マジか、もう始まっているのか、出遅れた。

「ヤベー！やっちゃまったぜえ！」

「それで、これからどうしますか？」

「どうって・・・そんなの・・・」

ヤバイ！何も考えてなかった！

「・・・何も考えてなかったんですね？」

バレたっ！？

「い、いや、それなりに当初は考えてたんだけど・・・色々と予定

外な事があって、計画を練り直ししてたんだけど、最近色々あったから、その・・・全然考えてなかった!」

いやあ面目ない☆反省してます。後悔はしてないけど。

「ハア、・・・それで、どうするんですか?」

デバイスに飽きられてるよ俺

「こ、こうなったら!」

「こうなったら?」

「・・・様子見だ!」

「・・・・・・・・・・チツ!・・・・・・・・」

い、今、舌打ちしたよ!コイツ主に忠実じゃないよ!

「な、なんだよ!言いたい事があるなら言えよ!」

「いえ、・・・別になんでもありませんよ」

なんかエボルトからコイツもうダメだみたいなオーラが出てるような気がする。

「そ、それじゃあ、行くかあ!」

ここは素早く行動してこの空気をなんとかしないと。

「主、お待ち下さい」

このオンボロデバイスめっ！空気嫁！！

「ン、ナンドヨ？」

下らない用件だったらポ○モンシール貼付けてやる！

「この城の宝物庫からなにやら懐かしい気配がするんです」

「懐かしい気配？（気配ってお前デバイスだろうが！）」

デバイスのクセに気配とか解るのかよ！

「はい（・・・再教育決定！）」

コイツ本当にデバイスか？

「それじゃ宝物庫に行くか？（面倒臭いな。帰っていいかな？）」

「はい！逝きましょう。全力で！（罪状増加！）」

と、いう訳で！現在俺達は宝物庫に居るんだな。

「うわぁースゲーな。見ろ！サラリーマンの給料がゴミのようだ！」

目の前には金銀財宝の山。眩しすぎるぜ！

「本当にこんな場所に有るのか？（ウソくせーな）」

「はい！確かに気配はするんですが・・・（疑心暗鬼）」

『なにやら懐かしい声が聞こえるじゃないか』

「えっ？」

なんか聞こえたよ！

「その声は！！！」

『よう！かなり久しぶりだな。エボルト！』

「ゼファアー！やはりあただったのですね（舍弟確保！）」

「ゼファアー？（またオリキャラが増えたよ！作者扱いされるのか？）」

今、俺の目の前にはエボルトと同じカード形のデバイス？らしき物が宙に浮いていた。

「主、紹介します。このデバイスは前の主が最初に使ってたデバイスであり、この世界に最初に誕生したデバイスでもある名は『ゼファアー』と言います」

「なるほど、世界最初のデバイスねえ」

エボルトよりもポンコツだあ！

『エボルトが主と言うってことは・・・コイツがそうなのか？』

「ええ、この方がそうです」

なにがだよ！主語を言え！主語を！

「・・・なるほどねえ、確かに面影はある」

ゼファーがなにやら品定めするように俺を見る。

「・・・ふむ、まあ、いいだろう」

だから主語を言えよ！主語を！

「はあ？だから何がだよ！」

「俺がお前のデバイスになってやるって事だ」

マジで！？次元レベルの骨董品ゲットだぜ！・・・かび臭いからあまり嬉しくないけど。

「えっと、いいのか？（もう少しここで眠っててもいいんだぞ。そうしとけ！このままじゃエボルトのパシリになるぞ！）」

「ああ、いいんだ。エボルトが認めたっていうんならそういうことだからな」

そんな簡単に決めるなよ！試験とか条件とか書くのが面倒臭いからってあんまりにも軽すぎるだろ！

「はい、我は当面主の力になれないのでゼファーを使って下さい（静粛要請！）」

「力になれないのでってどういう事だ？」

サボりか？

「それは、今の主じゃ我を使いこなせないからです」

子供には使えないってか！上等じゃねえか！改造○ード使って修正してやる！

「使いこなせないって、なにか特殊な条件でもあるのか？」

「はい、我を使うにはユニゾンデバイスが必要だからです」

「ユニゾンデバイスが？なんでさ？（リインとアギトがいいです！）」

「それは、主一人では我に登録されている魔法の情報処理が追いつかないからです（目標説得！）」

リリカル魔法はかなりの情報処理をしながら戦うらしい

「そんなに大変なのか？（プレミアムを愛でたい）」

「ええ、それはもう同時に三つの辞書を読むくらい大変です（過大表現！）」

そんなにか！！！！無駄に面倒臭いヤツだな。

「確かにそれは大変だなあ、戦闘がまともに出来ないよ（一生封印しとこうかな？）」

『まあそこで、俺の出番って訳だ』

「なるほどねえ、所でゼファーは一体どういったデバイスなんだ？
（興味ないけど）」

「俺か？ そうだな俺を一言で現すなら竜騎士だ！」

「リユウナイト
竜騎士？」

『ああ、俺は元々前の主の世界でリユウっていう金属生命体でまあ平たく言うと思っったロボットって所だ、それを前の主が改造して今の姿になったんだ』

細かい説明ありがとうございます。

「へえ、ロボットなんてなんかカッコイイじゃん！」

『そうだろう！ いや今度の主は話がわかる！』

「それでどういった戦闘タイプのデバイスなんだよ？」

『うむ、俺は面に接近戦を中心とした竜騎士の名の通り典型的な前衛タイプだ』

「へえ、俺の戦い方と合っているじゃないか」

『おおそうか！ 主も前衛タイプか！』

「俺達上手くやって行けそうだな！」

『ああ！これからよろしく頼むぞ主』

「ああ、よろしくなゼファー！」

こうしてゼファーも加わり、ついに俺は原作への介入を開始しようとしていた。

第14話 原作介入？いえ原作破壊です！

第14話 原作介入？いえ原作破壊です！

「お兄ちゃん！行っちゃ嫌だっ！」

現在俺は神王や魔王等に向こうに戻るため別れの挨拶していたんだが現在プリムラに止められます。

ヤバイ！マジで俺の心の天秤が揺れまくりダヨ！

ダメだこのままじゃ俺は負けてしまう、でも、嗚呼、俺はもう駄目かもしれん。

「駄目だよプリムラ。ヒナちゃんを困らせちゃ」

「そうだぜえ、此処は盛大に送り出してやらねえとな」

原在、魔王と神王がプリムラを諭してくれてる。

「・・・うん」

渋々ながらもプリムラは納得してくれた。

「ゴメンなプリムラ。また今度会いに来るから」

「本当？」

「ああ、本当だとも」

「絶対だよ！」

「ああ、かならずだ！」

「うん！」

俺はプリムラと指切りして約束した。

「さて、それじゃあ、またな」

「おう、元気でな日向殿」

「またね、ヒナちゃん」

「日向、またね」

こうして俺はプリムラ達に見送られて神界と魔界を去った。

海鳴市

「帰ってきたぞ！海鳴市よ！私は帰ってきたぞ！！」

「主・・・道路の真ん中でそんな恥ずかしい事やめてくれ」

「いやー、スマンスマン。久しぶりに帰ってきたもんだからつい
いやってしまったよ」

見兼ねたゼファアがツツコンでくれた。

「それで、これからどうするんだ主」

「どうしようかねえ」

現在平日のお昼時。ぶつちやけ、すずかの家に行っても何もする事が無い。

「うーん、そうだなあ。・・・はやての家にでも言ってみるかな」

取り合えず、行く宛てが無いので俺達ははやての家に行く事にした。

一方、その頃なのは達は・・・・・

アリサ「このバカチンが！」

なのは「うにやあ」

アリサがなのはに弁当に入ってたにレモンを投げ付けてた

「日向と結婚するのは私よ！」

「ア、アリサちゃん流石にそれは酷いよ。それに日向君と結婚するのは私だよ！」

「にやにー にー にー にー にー にー にー い！い！」

[illegible]

なにやら原作とは違う未来のビジョンで揉めていた。

一方、はやての家の前では……

「多分、病院に行つてなければ家にいると思うけど・・・」

ピンポン！

「はい。どちら様ですか」

「……アレ？ おかしいな？ 確かはやては一人暮らしの筈だが、今聞こえた声は別人だったぞ？」

ガチャ

「なっ！！」

なんと！玄関から出て来たのは殺人料理人のシャマルだった。

「どちら様ですか？（いま、何かとても失礼な事を言われたような・・・）」

「・・・・・・・・・・（アハハ、オツパイデカイナ）」

「あの、聞いてますか？（いま、何かセクハラされたような・・・）」

「・・・ハッ！？（多分シグナムの方がデカイヨ！）」

いかん余りに急だったからついついフリーズしてしまったぜ！

「ええーっと、俺は、はやての友達で日向といいます。はやて居ますか？」

「ああ、はやてちゃんのお友達ね、ちょっと待ってね今ははやてちゃん呼んでくるから」

そう言い家の中に入って行くシャルを俺は呆然と見送る事しか出来なかった。

「な、なな、なんでえ！？なんでシャルが居るんだ！？原作じゃもっと後じゃなかったっけ？」

マジで一体どうなってんだ！本当に予定外の事ばかり起こるなあ。

そうこう考えてる内にはやてがやって来た。

「久しぶりやなあ日向君」

「久しぶりだなはやて」

「本当に久しぶりやわあ。全然出番が無いから油断しとったわ。それで今日はなんか用事があったって来たんか？」

さりげなくコアな発言をするとは・・・なんて恐ろしい小娘なんだ！

「ああ、久しぶりにこっちに帰ってきたからなあ。今の時間だとすずか達学校で居ないからはやてに会いに来たんだよ」

「そういえばすずかちゃんが前に神王様に日向君が拉致られたってゆうてたな？、で、私はすずかちゃん達の替わりなんか？」

なんか刺々しいな・・・反抗期か？

「いや、そういう事ではない。はやての脚の事が気になって様子を見に来たんだよ」

「・・・まあええわ。取り合えず此処じゃあ何だから上がっていつてや日向」

「それじゃあ、お言葉に甘えて、お邪魔します」

こうして俺は八神家にお邪魔した。

ただいまりビングですよ！

「誰だオメー？」

おうおう！やっぱり居ましたよ！永遠の幼女ヴィータちゃんが居るよ♪

「・・・今なんか失礼な事を考えなかったか？（怒）」

・・・勘がいいな、ヴィータはニュータイプなのか？

「いいや。そんな事は・・・ないぞ（ボソ・・・多分）」

「ふん。まあいいか、んで、誰なんだお前？（いまボソツと多分つて言わなかったか？）」

「俺は葵日向だ。一応はやての友達だ」

「ふーん・・・プイッ」

えっ？それだけですか？ソッポ向いちゃうんですか！？

「ゴメンなあ日向君、ヴィータは結構人見知りなんよ」

「いやいいよ。何となく一目見た時からそうじゃないかと思ってたからさ（ホントは大ファンです！）」

本当は最初から知ってたけど、ここは知らないフリをしないとな。

・・・と、まあ、こんなやり取りをしつつ俺は今後の計画を考えていた。

いっその事、ある程度ネタバレして先に闇の書事件を解決しようかな？

・・・ようし！そうしよう。そしてその後にP・T事件を解決しよう！

そうと決まれば……

「はやて、ヴィータ、シャマル」

「どうしたん日向？」

「ん？」

「どうしました？」

「大事な話がある」

皆俺の雰囲気が変わったのを理解して真面目に話を聞く態勢になった。

日向「実はな……かくかくじかじか……フムフム……ふもっふっ!!」

そして俺は話た闇の書の本当の名前、はやての脚の事、このままだとはやての命も危ないことをそして解決策も

「にわかに信じらんねーけど何と無く嘘を言ってるようにも見えねーな。(今の会話でよくわかったなアタシ!)」

「そうねえ。確かに夜天の書の話は本当だし全部が嘘って訳じゃないだろうけど(って言うかふもっふってなに?)」

「うーん、判断材料があらん(流石日向君や!何気ない会話にボケを入れるなんて!)」

やっぱりそう簡単に信じてくれないかあ、まあ、頭ごなしに否定さ

れるよりはいいか。

「取り合えずこの話はシグナムが帰ってきてからだな」

俺がまとめ、全員取り合えずそれで一致してくれた。

そして……あつという間に夕方なんですよ。

シグナム達が帰ってきた。

取り合えずシャマルとはやてが俺の事と俺が話した内容を説明してくれた。

「ふむ、正直信じがたい話だが納得いく所もある（というか途中に出てきたふもつってなんだ!？）」

「そうなのよねえ」

「ザファイラお前はと思う」

居たんだ。ザファイラさん。全くきづかなかったよ。

「うむ、……俺は信じてみても良いと思うぞ。コイツの目には嘘は無い。それに、もし上手くいけば主の脚も治るかもしれん」

「そうか……」

シグナムが目を閉じしばし考えこんでいた。

「「「「……」」」」

そしてゆっくりとその目を開きこう呟いた。

「我等が剣と主の命。お前に預けたぞ！」

どうやら覚悟は決まったようだな。

「ああ！俺の命に代えてもお前等の未来をつかみ取ってやるよ！」

「我等の信頼を裏切ったら切り捨てるから覚悟しておけよ葵！」

「期待しますね♪（もしはやてちゃんを裏切ったらバツサリですよ♪）」

「任せたぞ（鍛えがいがありそうだな）」

「失敗したらぶっ飛ばすからな！（はやてはアタシが護る!）」

「頑張ってや日向君♪（歩けるようになったら日向君と・・・フフ・・・ウフフ・・・アハハ・・・）」

こうしてその場の勢いに任せた俺の計画は実行されることになった。

第15話 人は勢いとノリでなんでも出来る！（前書き）

サックス「ヤバイ、やってしまった！」

日向「何をやったんだ？」

サックス「なのは達のデバイスのカートリッジシステムの事考えてなかった！」

日向「なんだと！！」

サックス「なんか勢いで書いてたからすっかり忘れてた」

日向「どうするんだよ？」

サックス「どうしょっか？」

日向「仕方ない、アンケートを取るか」

サックス「アンケート？」

日向「そう、P・T事件でやるかオリジナルシナリオでやるかそれ以外でのアイデア等で」

サックス「なるほど！その手があったか！」

という訳でお手数ですが

？P・T事件

？オリジナルシナリオ

？それ以外のご要望

等があれば作者への激励の感想と共にお送り下さい

第15話 人は勢いとノリでなんでも出来る！

第15話 人は勢いとノリでなんでも出来る！

管理外世界のとある無人惑星

現在俺は、はやてとヒヨコ君とヴォルケンリッター達と共に闇の書の闇を消滅させるために誰にも被害が出ない無人惑星に居た。

「さて、ヴォルケنزの皆、体の方は大丈夫かい？」

俺は少し前に闇の書とヴォルケنزのパスを切断した。これは万が一闇の書と一緒に消滅しないようにと一応の保険としておこなったのだ。

「ああ、特に問題は無い」

「こっちは大丈夫よ」

「大丈夫だ」

「いつもと変わらねーよ！」

よし！皆何時もどおりで何も問題無いな！

「それじゃやるか！はやて！」

「うん、ほなやるよ!」

そしてはやては闇の書の管理システムにアクセスした。

く闇の書の中く

なにもない暗闇に一人佇む銀色の髪の女性が居た。

「私はまた・・・主を殺してしまうのか?」

「そんな事無い!」

はやては闇の書の管制人格の前に現れた。

「あ、主!! どうして此処に?」

「そんなん決まっとるやないか! 助けに来たんよ」

「そんな! 無理です!」

「そんなんやってみるとわからへんやろ」

「ですが・・・」

「主は私や。今は私を信じて」

「・・・わかりました。今一度主を信じます!」

「うん！ええ子や。でもその前に、名前を付けんな♪」

はやてはアゴに人差し指をあてながら少し考えた。

「そやなあ、祝福の風リインフォース、リインフォースや！」

「・・・祝福の・・・風・・・リインフォース・・・有り難うございます
主はやて」

「うん、それじゃ闇の書の闇、切り離そっか」

リイン「はい！主はやて」

く外側く

「・・・そろそろか？」

「日向君！聞こえる？」

日向の頭の中にははやての声が鳴り響いた。

「ああ、聞こえるぞはやて」

「こっちの準備はオッケーや！そっちはどうや？」

「こっちは問題無い！何時でもイケるぞ！」

「ほなやるよ！」

「そう言ってくれると有り難い、それじゃいくか！」

そう言い俺はゼファーを上に掲げた。

「リュウーナイト、ゼファーーーーーー！」

その言葉と共に俺の身体は光に包まれた。

そして包んでた光が消えそこにはFateのセイバーのような騎士甲冑（色は殆どが白で若干赤が混じった感じ）を着た日向の姿が現れた。

「よし！装着完了！」

「ほう、お前も騎士なのか？」

なにやらシグナムが嬉しそうに聞いてきた。

「ええ、俺は一応竜騎士です」

「そうか、ならば後ほど手合わせ願おうか」

やっぱりだーーーーー！？これ死亡フラグじゃね？

「・・・後ほど覚えてたら」

取り合えず曖昧に返事をしてみました。

「そうか、なら先ずはコイツを倒してからだ！」

「再生すんのはもう始めから解っているさ！ヒヨコ君！」

「ピョッ！ピピピヨ！（よし！任せろ！）」

ピヨオオオオー——————オオオオオオオオオ
オオオオオオオオ！！！！！！

ヒヨコ君がうねりを上げ闇の書の闇に全力で体当たりをする。その姿は肉眼では確認出来ず黄色い閃光だけが確認出来た。そして闇の書の闇がぶっ飛ばされた。

グヴオオオオツツツオツオオオオオオオグオオオ！！！！！！

闇の書の闇が苦痛で苦しむような叫び声が鳴り響いた。

「ピヨヨ！ピヨヨピヨッピヨ！！！！（この俺を！誰だと思っていやがるっ！！！！）」

ヒヨコ君の一撃と決めセリフが決まった！

「「「???」」」

しかし日向以外にはピヨピヨとしか聞こえなかった！

「よくやったぜヒヨコ君！これで障壁と装甲が無くなった！」

そう言い日向は何やら呪文を唱え始めた

「天候をみつる所に我はあり—————」

ヴィータに怒られてしまった。

「いや、あれは最後の切り札だからなあ。アレ全魔力を持って行くし、かなり負担がかかるんだよ」

「それぐらいで勘弁してやれヴィータ」

「そうよヴィータちゃん」

「悪気があった訳でも無いしな」

皆優しいね♪

「つたく、しょうがねーな。今回はこれで見逃してやるけど。次こんな事があったらただじゃ置かねーからなあ！」

「ああ、肝に命じておくよ（取り合えず一番の問題を片付けたし後はリインフォースか。まあ、それは対策もあるし、今は早く帰って寝よう。流石に今回は疲れたしな。）」

こうして俺の魔導師としての初戦闘は無事に終わり闇の書事件はもう少して終わりをむかえようとしていた。

番外編 最強の師匠達との修業（前書き）

今回は台本形式ではありません

不評の感想が一杯あったので今回は前の状態に戻しました

どちらの方が良かったか感想よろしくお願いします

それでは番外編スタートです

番外編 最強の師匠達との修業

こんにちは日向です

俺は今エボルトの力借りて別世界の地球に居ます

それは何故かと言うと最近他の小説の主人公達に比べて自分のキャラが薄いんじゃないかと思ったので別世界に行って修業することになりました

そして俺は鍛えてもらう為にある人を探ねた

「俺を鍛えて下さい！」

俺は全身前例土下座をして頼みこんだ

「いや、オラ、人に物を教えるの苦手なんだよなあ、ワリイけど他をあたってくれ」

断られてしまったが俺は諦めず誠心誠意をこめて頼んだ

「お願いします!! 俺を鍛えてください!!」

「うゝん、困ったなあ」

「どうしましたお父さん」

俺が頼みこんでる内に別の人が来た

「いや、なんかオラにコイツを鍛えて欲しいって頼まれてんだけど
オラ人に教えるの苦手だから困ってんだよ」

「いいじゃないですかそれくらい、この子もなんか必死そうだし」

なんと! この人は俺に味方してくれてるいい人だ

「しょうがねえなあ、わかった! オラが鍛えてやる! その代わりビ
シバシいくからなあ!」

「はい! 有り難うございます!」

遂に修業の許可がでた！

「そーい、やあ、まだ名前を聞いて無かったな」

「あつ、俺は葵日向と言います」

「そっか、日向って名前だな、もう知ってると思うけどオラの名前は、孫 悟空、だ！よろしくな」

「僕の名前は、孫 御飯、です、よろしくね」

こうして俺の修業は始まった

精神と時の部屋

一日目

「ほら、脇が甘いぞ！」

「クッ！はっ、はい！」

「後ろがから空きだぞ！」

「なっ！」

そして俺がぎずいた頃には悟空のハイキックが決まり俺は宙を浮いていた

「きゅう」

「今日はここまでだな」

今日の修業は俺が気絶したのでこれで終わった

三ヶ月後

シュイン

ゴォォン

バゴォオン

「くっ、早い！」

「いいぞ、その調子だ」

ブォォオン

ズドォォオン

「ぐああああ！」

「まあ今日はこんな所か」

もはや人の目で確認出来ない速さで修業してた

半年後

「十倍かめはめ波ーーーー！」

「十倍かめはめ波ーーーーー！」

ブゴオオオオオオン

「ハア、ハア、な、なんとか相殺出来たあ」

「よし！よくやったぞ！もう界王拳はバッチリだな！」

「ハア、ハア、ええ、なんとか会得出来ました」

俺は半年で界王拳をマスターした、そしてこの後から俺の地獄の修業タイムが始まった

「なにやら面白そうな事をやってるじゃないかカカロット」

「おっ、ベジータ！」

な、な、な、な、なんとサイヤ人の王子ベジータが現れた

「どうしたんだ、こんな所に来てなんか用か？」

「ふん、決まっているだろう！俺もコイツを鍛える為に来たんだよ！」

な、なんとベジータまでもが日向の修業に参加することになった

「マ、マジですか」

「ふっ、覚悟しろよ！俺はカカロットと違って甘く無いからな！」

果たして日向の運命はいかに

一年後

「ビックバンかめはめ波——！」

現在俺は最終試験としてフュージョンしたスーパーゴジータと闘っ

てます

というかただいま絶賛逃亡中です

「あんなのに勝てる訳ねーだろ！」

そうですよねーあんなのセルでも無理デスヨネー

「オラァ、オラァ、逃げずに闘え！」

そう言いながらエネルギー弾を乱射するゴジータ

「無理、無理！！あんたら卑怯過ぎだろう！」

「つべこべ言わんでかかってこい！本気出すぞ！」

「ひいー鬼畜だ！フュージョンしない状態でギリギリ相手出来る位なのにいなんでフュージョンしたあんたらに勝てんだよお！」

「そんなもん気合いでなんとかしろ！」

「なんだよお気合いつて！んなもんでどうにかできんなら誰も苦労

しねーよ!」

「ほう、口答える元氣があるなら本氣を出してもいいな」

「えっ? ちよつ、マジ?」

そしてさっきまで片手一本から発射されてたエネルギー弾が両手の指十本から発射された

「オラオラア、真面目にやらねーとどんどん増やしてくぞ!」

「くそくそ! なんだよアレ卑怯にも程があるぞ!」

俺は逃げまくったひたすら逃げまくった

そしてフュージョンがとける十分間逃げる事に成功した

そして最終試験の可否は

「やっぱダメだな」

「全然ダメだな！俺がもう一度鍛え直してやる！」

な、なんと不合格だった！っていうか勝てる訳ねーだろ！

そして俺の修業は延長された

更に俺の修業にピッコロや御飯、悟天、トランクスも加わり益々厳しくなった

そして修業を終える頃にはサイヤ人五人と互角に闘えるようになっていた

こうして俺の地獄のような修業は無事終わり俺はパワーアップする事に成功した

十万アクセス記念（前書き）

どうもサンクスです

遂に十万アクセス達成しました

この前、ネットの四コマ画像で面白いのを見つけたので今回はN
G集でお届けします

十万アクセス記念

十万アクセス記念

F a t e 編

冬木市郊外

俺は聖杯戦争に巻き込まれ今、士郎、セイバー、凜、アーチャーと共にイリヤと対峙していた

「いくらアインツベルリンのサーヴァントでも二対同時に相手するのは辛いでしょう！」

凜がイリヤを挑発した

「残念ね凜、このサーヴァントは日本人の方が馴染みが深いんだけど」

イリヤは凜の挑発などものともせず余裕を見せていた

「紹介するわ！バーサーカーのサーヴァント、ブロリーよ！」

「カカロットオオオオオオ！！！！！」

[illegible]

「逃げるわよ！アーチャー！」

「ああ！」

「逃げるぞ！セイバー！」

「なっ！敵を前にして逃げるなど！」

俺達はセイバーを無理矢理担ぎ込みながら全力で逃げた

完

リリカルなのはA. S編

第1話の最後

「な、仲間か!？」

そしてフェイトはちらつとなのはを見て力強く

「嫁だ!!!!!!」

「えっ!!!!!!!!!!」

ヴィータとなのはとユーノはビックリしまくった

パート2

「な、仲間か!？」

「友達だ!」

「そして僕もいまだに、タダの、お友達だぁ！！！！」

ユーノの悲痛な本心が漏れまくってた

はやてのお見舞いにて

「今日はどないしたん？」

なのは達はクリスマスプレゼントを渡す為にはやてに会いに来ていた

「こ、コート預かるわね、あっ！」

そしてシャルがなのはのコートを預かろうと手を伸ばしたがコートの中の

ゴトゴトゴト

大量のカードリッジが落ちた

(ニヤリ)

(こっ、コイツ殺る気だ!!!!!!)

この時この部屋に居るのは以外の関係者一同が同時に同じ事を思った瞬間であった

戦闘訓練

「模擬戦をするぞ、テスサロッサ」

「はい」

シグナムとフェイトは模擬戦をしに行った

それを見ていたヴィータが

「ウチ等もやろうぜ高町なんか!」

ブチッ

「なっ！ バインド！？」

ヴィータの身体を桃色のバインドが締め付ける

「そうだね、もうお話し聞かせて貰う必要無いもんね」

そう言ってなのはヴィータにレイジングハートを突き付ける

「ギヤアアアアアアアアアア！！！！！！」

この日一人の守護騎士が尊い犠牲となった

リリカルなのはSS

とある日の訓練

機動六課訓練場

「本日の早朝訓練、ラスト一本！皆、まだやれる？」

「はい！！」

なのはの問い掛けに力強く答えるフォワード達

「それじゃあ、5分間私のディバインバスターを耐えきれたら終わりで誰か一人でも気絶したら最初からやり直しね、あっ、反撃は無しだから」

（悪魔めっ！！！！）

この時フォワードメンバーの気持ちが初めてシンクロした瞬間であった

ヴィータVSゼスト

「ゼストったか！何企んでるのか目的言えよ！納得できる内容なら管理局はちゃんと話を聞く！」

「若いな・・・いやお子様では私の筋肉の素晴らしさは理解できん

か
」

「誰がお子様だー！！」

二人の戦いは益々ヒートアップしたヴィータが一方的にだが

以上で今回のNG集は終了です
楽しんで頂ければ幸いです

第16話 作者が最初に作ったシナリオまでも破壊してしまった（前書き）

「凄い事になったぞ日向。」

「どうした？作者。」

「この小説、遂に総合ユニークアクセス数一万超えたぞ」

「ほ、ホントか！それ。」

「フッフ、色んな人に叩かれ耐え忍んできたが遂にきたぜ」

「ほんとに、台本形式で色んな人に凄い叩かれてマジ凹みだったもんな」

「いや、凹んだけど、それはこの小説が良くなるように心を鬼にしておろしてわざわざ感想を書いてくれたんだ。そこは感謝だよ、日向君」

「そうだな」

「そこでだ、ユニークアクセス記念と日頃の感謝を込めて日向君！君を他の小説に貸し出そうと思う！」

「俺なんか使いたい人なんて居るのか？」

「さあ、それは分からんな」

「分からんって、これで居なかったらお前また凹むだろ。この前のアンケートだって今だに一通もきてないのに」

「いやまあそうだけども、でもやっぱり試してみたいじゃん」

「ハア、どうなっても知らないぞ」

「日向の了承も得たし、それでは、もし日向を使いたいと思う方はこの小説の感想と一緒にお送り下さい。使いたいと送って下されば後は好きなようにお使い下さい。許可の返信はありませんので温かい内にお使い下さい」

第16話 作者が最初に作ったシナリオまでも破壊されてしまった

海鳴市

俺は修業を終え数日ぶりに海鳴市に瞬間移動で戻ってきた

「フッフ、俺は強くなった。もう誰にも影が薄いなんていわせないぞおー！ー！」

日向はそんな台詞を吐きながら八神家へと足を運んだ

「お邪魔します。」

日向は勝手知ったる他人の家と言わんばりに八神家に入った

「あつ、その声は日向く……だれ？」

日向の声に気づいたはやてがいち早く日向を見たが

「誰って、日向だよ。数日会わなかっただけでもう忘れたのかはやて。」

「いや、まったく別人やで、纏ってる空気とか筋肉とか。あと若干身長が伸びとる。」

日向は精神と時の部屋で一年半修業したので当然筋肉や雰囲気など

が前とは別人のように変わったが筋肉が付きすぎたせいで身長はあまり伸びなかった

「一年半修業したのに身長が……」

「それでどないしたんや。闇の書の闇倒した次の日に急に居なくなつて心配したんよ。」

「いや、最近の俺影薄いんじゃないかなって思って食欲旺盛な戦闘民族の方々に修業してもらったんだ。」

「食欲旺盛な戦闘民族って…なんかもうツツコミ入れる気もせんわ。」

「あはは、いやーほんと大変だったよ。何度死にそうになったもんか。」

「って、そんな話しとる場合じゃなかったんや！」

「ん？どうしたんだはやて。」

「実はな……」

「ひくなくた」

日向の後ろから日向を呼ぶ声が聞こえた

「!?!? な…に、このプレッシャーは! ま、まさか…」

日向が恐る恐る後ろを振り返るとそこには

「フフフ、ずいぶんと久しぶりね日向。」

凄いオーラを纏ったアリサが仁王立ちしていた

「オ、オヒサシブリデス、アリササン」

あまりの迫力に日向はカタコトになった

「ほんと、すごい久しぶりね、帰ってきてたのに連絡もしないでどうしてたのかしら、ひ・な・た」

「エツト、ソノ、イヤ、アノ」

「はやてから帰ってきてるって聞いた時はほんとビックリしたわ。向こうに行ってからまったく連絡はよこさない上に帰ってこないんだもの。そしたら帰ってきてるって…フフフどうしてくれようかしら。」

「ゴ、ゴメンナサイ、ユルシテクダサイ」

「ダメよ…今回ばかりは本当に心配したんだから…それに私に隠し事してたでしょう。はやてから包み隠さず全部聞いたんだから…」

「ハヤテサン？」

「ゴメンな日向君。ばれちゃった。テヘツ」

（なにばれてんじゃコノヤロー）

「すまない主。実はばれた原因は俺とエボルトなんだ」

突如日向の後ろからゼファーとエボルトが現れた

「ドウイウコトデスカ」

「いや実はアリサ殿とすずか殿が遊びに来てるのに気づかず普通に俺達が宙に浮いて話てる所を見られてしまったてな、それで魔法や闇の書の事を全部話してしまったんだ。」

「ナニシテルンデスカ、アナタタチハ」

「いやーゴメンな日向君、二人の尋問に勝てへんかった。」

尋問って何したんだよあいつ等

「何ってこれから日向が味わう事よ」

「ヒトノココロヲカッテニヨマナイデクダサイ」

「今のアンタに人権なんてないわ。それより覚悟はいいわね、ひ・な・た。」

ぎっ、ギヤアアアアアアアアアア

日向の悲鳴は海鳴市全体に鳴り響いた

「ど、どうしたはやて！なんかすごい悲鳴が聞こえたんだ……けど……」

日向の悲鳴を聞いたヴォルケンズが駆け付けた

日向は現在モザイクがかかった状態である

「え、えっと、主その物体はもしかして日向ですか」

シグナムが勇気を振り絞ってはやてに聞いた

「そやよ、正確には日向君だった物体やけど」

「日向君だった物体って、は、はやてちゃん…」

シヤマルははやてからなにかを感じ取ったのか最後まで言葉を発しなかった

（まったく日向君は、私だけじゃ飽き足らずアリサちゃん達まで垂らし込んで、後でお仕置きが必要やな。）

「垂らして酷いじゃないか、はやて。」

日向が復活した

「なんで考えとる事が分かるんや!?!」

はやては心を読まれ焦った

「なんでって、それくらい今の俺なら朝メシ前だぜ。っていうか俺いつの間にはやてのフラグ立てた?」

「ひやあ、そんな大きな声で言わんといてえ」

はやては顔を真っ赤にして日向の口を押さえようとした

「へえ、あんた、また私の知らない所ではやてにフラグ立てたんだ？」

アリサが先ほどよりも凄まじいオーラをだして日向を問い詰めた

「い、いや知らねえし、またってなんだよ、またって。」

「ふーん、あくまでシラをきるのね。私とすずかじゃ飽き足らずになのはとはやてまで毒牙にかけといてそういう事言うんだ？」

「アリサとすずかの気持ちは前から分かったが、っていうかいつの間になのはのフラグまで立ってんだよ」

「そんなのこっちが聞きたいわよ！」

「へえ、アリサちゃんやすずかちゃんだけじゃなくてなのはちゃんも毒牙にかけとったんか日向君」

ここに一人の修羅が誕生した

（カ、カオスだ……………）

ヴォルケNZとデバイス達はこの修羅場に戸惑う

（な、なんで帰って早々怒られなきゃならないんだ）

日向はなんで自分がこんなに怒られなきゃならないんだと心の底から思ってた

「日向！ちゃんと聞きなさい」

「日向君聞いとるんか！」

「ご、ゴメンなさいっ」

日向はもう力尽きそうだった

（た・す・け・て）

このままじゃまずいと思いヴォルケNZにアイコンタクトをしたが

プイ

皆、我関せずと目線を反らした

（アハハ、俺のライフポイントはもうゼロですよ……）

日向が壊れた

二人の説教が終わる頃には日向は真っ白に燃え尽きてた

第17話 三途の川まで一直線！本当に怖いのは身近にいる恋する乙女であつた

前回のあらすじ

日向はナメック星で辛くもフリーザを倒すことができたがナメック星の崩壊までの時間が残り僅かしかない、どうする日向

「って、違うでしょーがあ」

バチン

アリサの快進の一撃^{ハリセン}が決まった！

「いってゝえ。何すんのさアリサ」

「それはこっちのセリフよ。なに読者様に嘘のあらすじ言ってるのよ。」

「いやあ、一度やってみたかったんだよ。」

「ふざけんなあああああ！」

ゴン

「ギャフン！？」

アリサの快進の一撃^{ゲンコッ}が決まった

「大丈夫か。日向君？」

はやてが一応日向の安否を確認する

「……………」

返事がない。ただの屍のようだ。

「まったくだらし無いわね」

アリサはどこぞの王様の如く罵声を浴びせる

「ええっと、そろそろ話進めていいですか？」

このままじゃ話が進まないのでシャルが話を持ち出した

「ああ、いいよ」

日向が復活した

「それじゃあ。えっつと、日向君今まで何処に居たの？」

「ああそれか。修業してたんだ」

「修業って、これ以上強くなってどうするの？」

「いや、必要だろ。主人公は次の敵と対等に戦う為に更に強くなるのって王道だろ。」

「いや、まあ、そうですけど、日向君の場合ちょっとというかもう有り得ない位強くなってる気がするんですけど」

シャルの言葉にその場にいた全員が頷いた

「まあいいじゃないか。それよりもエボルト、夜天の書の初期化、上手くいったか？」

「はい、上手くいきましたよ主。」

日向はあらかじめエボルトに夜天の書の初期データの作製と上書きを頼んでいた

「それじゃ、もう大丈夫だな。」

「はい、暴走することもしインフォースが消滅する必要もありません。」

「そうか。それじゃとりあえずこれで闇の書事件はひとまず終わリだな。」

日向は一応心配だったらしくエボルトの話聞いて安堵の笑みを浮かべた

「…ねえ日向。何か大事な事忘れてない？」

「えっ……なにをどすかアリサさん？」

日向は尋常じゃないアリサのオーラに京都弁になっていた

「アンタ、前回、私とすずかの気持ちに気づいてたって言ったわよね？」

（こ、これはまさか！）

「私達の気持ちに気づいてたのに数ヶ月も私達の事放置してたよね。」

「なっ！？その声は………」

日向は八神家のリビングの入り口から聞き慣れた声が聞こえたので恐る恐る確認した

「久しぶりだね。日向君」

そこには笑顔の修羅がいた

「ドウシテ、スズカサンガココニ？」

「私が電話で教えたのよ。前回話した内容も含めて全部ね。」

（そ、それって俺死亡フラグじゃね？）

全くもってその通りである

「日向君♪」

「は、はいっ、なんですか、すずか様！」

「いっぺん死んでみる？」

「！！¥\$%！？&○☆◇□#♪」

すずかの死刑勧告に日向は人の理解できる言葉を喋る事ができなかった

「それじゃあ逝こうか日向君♪」

「い、嫌。やめて。」

「ほら、大人しくしなさい！」

日向はアリサに羽交い締めされて退路を失った

「ふふふ、そんな怖がらなくてもいいんだよ。ちょっと死ぬほど痛いだけだから♪」

そんなの誰だって嫌ですすずかさん

（このままじゃ前回と同じかそれ以上酷い目にあう。だからお願いします。助けて下さい。はやて、ヴォルケンスの皆様。）

日向は念話ではやて達に助けを求める

（無理やな。）

（無理だ。）

（無理だ。諦めろ。）

（無理ね。）

（無理だな。骨は拾ってやる。）

返答までの時間0、1秒、最短記録である

（オワタ、俺の人生。）

「さあ、逝くよ日向君。」

「!？」

ぐ、ぐぎやあああああああわっぴX○□◇☆?&%||#\$

もはや言葉にならない本日二回目の日向の叫び声は再び海鳴市に響き渡った

第18話 枯れない桜の木の下で

こんばんは日向です。

現在俺は夜の桜並木を散歩中です。

それは何故かという昼間の騒動で心身共に疲れたのでリフレッシュするために新鮮な空気を吸いたかったからです。決してアリサ達が恐くて逃げ出した訳ではありません！本当ですよ？

「また主達に怒られても知らんぞ。」

「夜桜は最高なんだぞ。仕方ないじゃん。っていうか何でついて来るんだ？リインフォース。」

日向の後ろをリインフォースがなぞるようになっていく

「何でかは、自分の胸に聞いてみる。」

「それを言われると困るな。」

日向はやれやれというジェスチャーをしてから

「まあ、今夜はただの桜見物だからいいけど、他の奴らには内緒だぞ。」

と言い再び歩きだした。そして再び歩き始めてから数分後、日向達は枯れない桜の木の前にたどり着いた。

「どうやら先客が居たようだな。」

枯れない桜の木の下に金髪でロングヘアーの少女が一人立っていた

（あれは、確か………芳乃………さくら………）

日向は自分の持っている情報を頼りに桜の木の下に居る少女の名前を思い出していた

（彼女も魔法で悲しい思いを経験した人だったよな？そして数年後にまた辛い決断をする事になるんだよな。）

日向はこの世界に来た本来の目的である魔法で不幸になる人々を救うという役目を思い出し彼女を救いたいと思いさくらに声をかけた

「こんな遅い時間にどうしたんですか？」

日向の声に反応して、さくらはゆっくりと振り返り

「待っていたよ。日向君。」

「え？」

予想外の返答に日向は驚いた

「あ、あの俺達初対面ですよね？」

「うん。今はまだその時じゃないから、はじめましてかな。」

（その時じゃないから？）

「あの、よく分からないんですけど、一体……」

「今はそれでいいんだよ」

「……」

「ふふ、それじゃあ時間も無いし、いくよ。」

え？ ちよつとなんかヤバイ？

「私の魔力じゃ送る事しか出来ないから帰りは自分でなんとかしてね。」

は？ 送る？ 帰り？ なんか凄い魔力なんですけど？

「日向。これは一体どうなっている？」

状況にまったくついてこれ無いリインフォースは状況説明を日向に求めた

「そんなのこっちが聞きてーよ！」

「それじゃあ、大変だと思うけど頑張ってね。」

「いや、何が!!」

「いってらっしゃい！（＾＾）！」

「なんか前にも似たような事なかった？」

そして日向とリィンフォースは転移魔法らしき呪文で、何処かに飛ばされた

「これで本当によかったの？ 『夢月』（むつき）ちゃん。」

微かに聞き取れる声でさくらはつぶやき

「うん。今はそれでいいの。」

桜の後ろから一人の少女が出てきた

「あとは、運命に任せよう。お兄ちゃん、頑張ってね。」

第18話 枯れない桜の木の下で

第19話 古き始まり

第19話 古き始まり

日向とリインフォースはさくらの転移魔法によって何処かに飛ばされた

「うわああああああ」

ドスン

「イテテテ、ん？此処は何処だ？」

日向は何処かの見知らぬ廃墟に飛ばされた

「あ、アンタ誰？。」

日向の目の前に一人の少女が驚いた顔で警戒しつつ日向に質問した

「ん？俺？ああ俺は葵日向。キミの名前は？」

少女は危険な人物ではないと判断したようで警戒を解き自己紹介をした

「アタシはミゼット。ミゼット クローベル。一応これでも凄腕の傭兵なんだよ。」

「ミゼットか。ミゼット？あれ？ミゼットって確か……三提督。いや、それにしては若すぎる。俺の知ってるミゼットはかなり高齢な老婆だったはずだ。それに傭兵って……まさか……」

日向はすっかり自分の世界に入りブツブツと小声で喋ってた

「日向？さっきからどうしたんだいブツブツと。」

「え？あ、いや。なんでもないよ。それよりミゼットに聞きたい事があるんだ。」

「聞きたい事？」

「此処は何処なんだい？あと今って西暦何年？」

「おかしい事を聞くねえ。まあいいか。此処はミッドチルダで今は

ミッド歴0005年だよ。」

「ミッドチルダ！？ミッド歴0005年！？」

衝撃の事実向日向驚いた

（ミッドチルダだって！しかも50年前だということのか！）

「なにを驚いてるのか知らないけどこっちも聞きたい事があるんだ。」

「え？ああなんだい。」

「この辺でラルゴっていう馬鹿そうな面をした男の人を見掛けなかったかい？」

「（もう一人の三提督かよ！しかも馬鹿面って。）いや、見掛けなかったよ。」

日向は内心でツツコミながら見掛けなかった事を告げた

（なんかどつと疲れたな）。取りあえずミゼットに頼んで何処かで休ませてもらおう。…………あれ？なんか大事な事忘れてるような？）

「うわあああああああああああああ」

「え？」

ドスン

「グハア!？」

空からインフォースが降ってきて見事に日向の上に墜ちた

「あれ？此処は？……日向、私の下で何をやっている。」

「お前が俺の上に墜ちて来たんだろうが!!!」

「それよりも此処は何処だ。」

「スルーかよ。見事にスルーしたよ。……ああ、なんか余計に疲れた。ホント疲れたよ。早く休みてーよ。ハア、仕方ない。」

チラ

日向はミゼットをチラッと見てミゼットに聞かれないようにリインフォースの耳元で小声で話した

「なっ！？此処がミッドチルダで50ねフング。「バカ声がでかいだろう！ミゼットに聞こえたらどうするんだ！」

「プハア。すまない日向。つい取り乱してしまった。だがこれからどうするんだ。にわかには信じられないが此処は過去なのだろう。どうやって現代に戻るつもりだ。」

「いや、まったく帰る方法が分からない。芳乃さくらは帰りは自分でどうにかしろって言ってたからアレは当てに出来ないけど来ることは出来たんだから帰る事も出来るだろう。」

「まあ、そうだが……………」

「取りあえず今日の所はもう休もう。今のミッドチルダは昼だけど俺達が飛ばされた時間は夜だったからもう眠い（Ｑ）。○○」

「話は終わったかい？」

ミゼットがタイミングよく話かけてくれた

「ああ終わったよ。それとミゼット。悪いんだけど何処か寢床はな
いかい？俺達この世界に来たばかりで休む所がないんだよ。」

「なんだ。アンタ達別次元の人だったのか。それならアタシの家に
来なさい。」

「いいのか？俺達の素性も分からないのにそんな簡単に自分の家に
泊めたりして。」

「ああ大丈夫だよ。これでも人を見る目はあるからね。アンタ達な
ら大丈夫だよ。ちっとも危険そうには見えないね。」

「そうか。ならお言葉に甘えてお世話になります。」

「うん。それじゃあアタシの家にいこうか。」

「ああ、よろしく頼む。」

こうして日向とリィンフォースの過去での一日は終わった

第20話 やるべき事

第20話 やるべき事

日向とリインフォースがミゼットの家に泊まり一夜が明けた

「さて、これからどうしようか。」

「どうするも何も元の時代に帰るだけだろう。」

リインフォースが何言ってんだコイツという目で日向を見た

「まあ、そうなんだが、芳乃さくらがこの時代に俺達を送ったのに何か事情があるはずなんだ。そうじゃなければ時空転移なんて魔術使うはずがない。」

「確かにそうだが……」

「それにこの時代にはまだ時空管理局はまだ存在していない。これはある意味チャンスだ。」

「自分で時空管理局を作って私物化するつもりか？」

「ギクッ、な。なんの事かな。」

日向はかなり動揺しているらしく目が泳いでた

「目が泳いでるぞ。後白々しくギクッとか言うな。わざとらしいからなんかイラつくぞ。」

「そ、そんな事より、どうやって現代に戻るかだ！」

「話を反らしたか。まあいいだろう。それでどうやって戻るつもりだ。」

「それなんだが、芳乃さくらは俺の事を知っていた。つまり俺は過去芳乃さくらに出会ってるんじゃないかという結論に達した訳だ。」

「まあそうだろうな。だからと言ってこの時代には関係ないだろう。」

どうやらリインフォースは芳乃さくらの年齢を誤解しているようだ

「いや、関係ある！リインフォースは知らないだろうが芳乃さくら

はああ見えて実は年齢が6じゅ「ハーイ（＾Ｏ＾）／ストップ」グ
ハア！」

なんとなにもない空間から突如芳乃さくらが現れ日向に回し蹴りを
食らわした！

「なっ!？」

「いてえ！なにすんだっよさくら？」

「レディの年齢を軽々しく口にしちゃダメだよ日向君。」

「別にいいじゃないか見た目幼女なんだから。後いきなり出てくん
な！話が進まないだろう。」

「見た目も気にしてるんだからそれも禁句だよ。それに日向君が私
の年齢をバラそうとするのがいけないんだよ。」

年齢ぐらいで私（作者）の制作プランを潰さないで欲しいものだ。
まったくこの幼女は

「少し頭冷やそうか。作者さん？」

ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

「フッフ、次から気をつけてね作者さん。」

わわ、分かりました次から気をつけますっ

「まあ、KY（作者）はほっというて、どうしていきなり現れたんだ？」

「だって、日向君が私の年齢を「それはもういいから」…もう、せっかちなあ、日向君は。」

なかなか話が進まない

「あとう、さっきから私は無視ですか。」

あっ！

「すっかりリインフォースを忘れてた。」

という訳でリインフォースとさくらはお互いの自己紹介をした。そして話は戻り

「それでこの時代に来る前に自分の力で戻って来いって言うておいてなんでいきなり姿を現したんだ。」

「それはね、最初本当は日向君を強くするために送ったんだけどね、日向君どういう訳か有り得ない位強くなってるって知ってね。これじゃあ私がこの時代に送った意味がないじゃん。そこでどうしようか迷ってた時に日向君が私の年齢をバラそうとしてたからついこの時代に来ちゃった。テヘッ」

テヘッって結局年齢かよ！どんだけ年齢気にしてるんだよ！

「やっぱり頭冷そうか？」

申し訳ありません！もう暴言は吐きません！

「はあ、それじゃあ別にこの時代のさくら達に会おう必然性とか枯れない桜の木を枯らす為にこの時代に送ったとかそういうのは全く無いんだな。」

「うん。基本的にはノータッチだよ。」

「それではすぐに元の時代に戻れるのかさくら。」

「うん。この時代の枯れない桜の木の力を借りればすぐに帰れるよ
リインフォースちゃん。」

さくらの言葉を聞きリインフォースは安堵の笑みを浮かべた

「だが、それじゃ面白くない。というかこのまま帰っても俺はまた
アリサ達にさくらの事で怒られるに違いないだろう。」

「まあそうだろうな。きっと主達は夜の無断外出に知らない女と仲
良くなったと話せば恐ろしい事になるだろうな。」

「大変だねえ日向君。」

「他人事みたいに言うな。半分はお前の性なんだからな、さくら。」

「それでどうしたいんだ日向。」

「話す前に、さくら、一ついいか？」

「なにかな日向君。」

「さくら、いや芳乃さくら。お前俺達に何か大事な事を隠してるだろ。」

日向は真剣な顔でさくらの顔を見た

「な、なんの事かなあ（まさか夢月ちゃんの事に感ずいた！？）。」

「惚けるな、お前は这个世界の住人なのに俺の事を詳しく知りすぎてる。そしてお前は本来使えない転移魔法が使える。更にミッドチルダの事も知っている。あまりにも不自然だ。」

「た、確かにそうだね。（よかったあ夢月ちゃんの事じゃなかった。）」

「それらの情報から考えた結論お前は这个世界の芳乃さくらでは無い。もしくは誰か他の世界の協力者がいるな。」

「な、なかなか鋭い洞察力だね日向君（あぶない、あぶない、ホン

ト兄妹揃って感がいいよね。こっちの心臓に悪いよ。」

さくらはまだ明かすことのできない日向の妹の夢月の事がバレるんじゃないか内心ヒヤヒヤだった

「で、どうなんだ、さくら。」

「いずれ話そうとは思ってたけど（私の事はいいよね？）、しょうがないから話すか。」

そうしてさくらの真相が語られる事になった

「日向君の考え通り私はこの世界の芳乃さくらじゃないよ。」

「やっぱり。でもなんでこの世界に？」

「それは……………」

「言にくい事なのか？」

「……………うん。」

「だったら無理に話さなくてもいい。」

「ううん、いずれは話さなくちゃいけない事だから、それに私だけ日向君の事を知ってるのはフェアじゃないから。」

「そうか……」

「私の居た世界で大きな戦争があったの。」

「戦争？」

「そう戦争。とても大きな戦争だった。町を都市を国を世界をそして地球を更には銀河まで食らいつくす程の大きな戦争だった。そして私はその戦争で知り合いや家族をすべてを失ったの。」

「!？」

「最初は小さな争いだったの。だけど争いは徐々に大きくなってやがて世界を巻き込む大きな戦争になったの。そして国と国との争いだけじゃ終わらなかった。突如現れた神界、魔界、そして宇宙に現れたトランスバール皇国と白き月。そして全銀河を巻き込んだ黒き

月とヴァル・ファスク、全ての銀河に住む人が戦争に巻き込まれた。そして銀河に住む人々が戦争の愚かさにきずいた時にはもう遅かったの。突如起こった時空震^{クロノ・クェイク}。それによって銀河に住む人の9割が死んだの。」

「!？」

「そして生き残った人々は絶望した。友達を恋人を家族に住む家を全て失って生きる気力もなく次々と自殺していった。そして最後には私以外の全ての人類はいなくなった。」

「!？」

「そして一人になった私は枯れない桜の木に願ったんだ。こんなはずじゃない未来、私が望んだ幸福、当たり前の平和、すべてを手に入れるチャンス欲しいって。そうしたら桜はチャンスをくれたんだ。平行世界で似たような事が起こるかもしれない世界で、私の存在を受け入れてくれる私と融合する事が出来たんだ。」

「そんな事が……」

「だから私は戦争を回避できるだろう存在を探した。そして私は日向を見つける事ができたの。」

「でもなんで俺なんだ？他にももっと戦争を回避できる奴がいるだろう。」

「それは：私が日向君の事を昔から知っているから、だからもう一度私は日向君に賭けたの。」

「俺を昔から知っている？じゃあ俺はやっぱり過去の世界でさくら達に出会うのか？」

「ううん、それは違うの。確かに私もお兄ちゃんも音夢ちゃんも日向君の事を知っているけど、それは日向君であって日向君じゃない存在なの。」

「俺であって俺じゃない存在？」

「50年前、まあ大体今位の時期かなあ、私はお兄ちゃんを音夢ちゃんに取られてかなり落ち込んじゃったの。それで桜にお願いしたんだ。私だけの、ずっと私の傍に居て守ってくれるナイトが欲しいって。そしたらね、日向君が出てきたんだよ。まあ正確には日向君の分身、コピーかな？」

「そんな事が有ったのか。」

「それで日向君がきてからの生活はとても充実してたんだ。今まで一人での淋しい生活が日向君一人が加わっただけで全く別の明るく楽しい毎日になったんだ。」

さくらはさっきとは違いとても楽しそうに話していた

「それからしばらくして桜に異変が起こったんだ。」

「異変？」

「桜が原因不明の暴走をしたの。」

「原因不明の暴走……………」

「本当はすぐにでも桜を枯らさなきゃいけないのに私は桜を枯らす事を躊躇った。日向君との生活がとても大切だったから。桜を枯らしたら桜から生まれた日向君が消えてまた一人ぼっちになってしまう、またあの生活に戻ってしまう。そう思うととても怖かったの。」

さくらは悲痛な顔で辛そうに話す

「でもそれは……………」

「うん、言いたい事は分かるよ。でもその先はダメだよ。もう一人の日向君にも散々言われたから、あの時はいっぱい怒られたよ。でもそれ以上にいっぱい温もりと愛情、そして幸せを貰ったよ。」

「さくら………」

「そんな悲しそうな顔をしないで、私はそのことについては後悔してないから。それに今度は日向君が私を幸せにしてくれるんですよ。」

「ああ、もう一人の俺が幸せにできなかった分俺がさくらを幸せにしてやるよ。」

日向は力強くまっすぐさくらを見て答えた

「さくら。元の時代に戻ったら一緒に生活しよう。家は神王や魔王にでも頼めばすぐ出来るし。」

「ふえっ、日向君大胆だよ。そんないきなり、リインフォースちゃんも見てるのに恥ずかしいよお。／／／」

「よかったなさくら。いっぱい日向に幸せにしてもらえ。」

「リインフォースちゃんまで／＼／」

さくらは顔を真っ赤にして今にも茹で上がってしまいそうな状態だった

「俺じゃ嫌か、さくら。」

「そ、そんな事ないよ。とっても嬉しいよ。でも本当にいいの?」

「ああ、さくらだからいいんだ。」

「それじゃあ、ふつつか者ですがこれからよろしくお願いします。」

「ああ、よろしくな、さくら。」

「取りあえず話は終わった?」

「えっ?」

部屋の入り口から声が聞こえ日向とさくらは慌てて振り返った

「はい、終わりましたよ。ミゼット。」

リインフォースだけは始めから気づいてたらしく冷静に声の主のミゼットに返事をした

「ミミミ、ミゼット。いつからそこに居たんだ？」

「そうねえ、どうやって元の時代に戻るかって辺りからかしら。」

ほとんど最初からじゃないですか

「まったく気配を感じなかったよ。」

「昨日言ったでしょう。これでも傭兵だって。」

「参ったなあ、まさか油断していたとはいえこれほどとは。恐れ入ったよ。」

「で、どうするの、秘密を知った私を。」

「どうもしないよ。ただ、ちつとばかり俺の計画に協力してもらうだけだ。」

「ええ、いいわよ」

「え？ いいの？」

「ええ、こっちの手伝いをしてくれるならね。」

「手伝い？」

「そう手伝い。まあ正確には行方不明になったラルゴを探すのを手伝ってほしいの。」

「ラルゴ探し？ まだ見つかってなかったのか。」

「ええ、そうなのよ。あの馬鹿まだ見つからないの。」

「まったく手掛かりとか無いのか？」

「何処かに転移した形跡はあるんだけど何処に飛ばされたかまったく解らないの。」

「何処に飛ばされたか解らないんじゃないかな。」

完全にお手上げ状態である

「もしかしたらだけど。」

「うん？」

「もしかしたら、私、何処に行ったか解るかもしれない。」

「ホントか。さくら！」

「うん。確か今くらいの時期にイギリス辺りで大きな魔力反応があったの。」

「それがどうラルゴに結び付くんだ？」

「正確には、日向君の魔力反応だったの。」

「なんだって!？」

全員さくらの衝撃的な一言に驚いた

「それに、他の魔力反応もあったしまず間違いはないと思うよ。」

「これはもう決まりだな。」

「そうだな。」

「そうね。」

上から日向、リィン、ミゼットとそれぞれ肯定の言葉が出た

「俺達の目指す地は地球のイギリスだ!」

こうして日向達はラルゴを探しにイギリスに行くことになった

（イギリスには確か闇の書事件で重要なあの男がいた筈だ。多分、今回のラルゴ探しにも関わってる可能性もあるかもしれない。これは本当にチャンスだな。それに上手くいけば……）

ラルゴ探しとは別に日向には別の思惑があった

「ククク……。」

この後に日向はこの自分の思惑が自分をしいては周りの人間を巻き込む大きな騒動になるとは今の日向に知るよしはなかった

第21話 変わりは始める過去・・・過去に行けるって素晴らしいな♪(前書き

遅れすぎて申し訳ありません。

第21話 変わり始める過去・・・過去に行けるって素晴らしいな♪

第21話 変わり始める過去

「一カ所に固まるな！グレアム！もっと速く動け！」

ピュン！ ドオン！ バァン！

「うわぁ！？」

俺達は今、イギリスにいます。ここに来るまでの経過は特になにも無かったのって簡単に説明します。

ラルゴの魔力反応を追ってイギリスについた俺達は簡単にラルゴを見つけたんだ。そこでボロボロだったラルゴを発見して看病したのがグレアムだった。そこでグレアムがこっちの世界（魔法）に関わりたと言い出したので、俺達はグレアムを鍛えることにした。そして――――

「よそ見するな！」

「はっ、はい！」

俺とリインは、グレアムを徹底的に鍛え上げていますよ。勿論、ドラゴンボール式でね♪

ゴォン！

「しっ、死ぬう!？」

うーん♪いい感じになってきたね。最初は俺の事をナメてたからついつい本気で殺しちゃいそうだったけど、今はいい感じに染まっているね。

「し、師匠お!もう限界です!」

グレアムが直訴する。

「うむ、今日はこれくらいにするか」

しかし……師匠とはいい響きだな。

「しかし…えげつないわね。あんたの訓練って」

離れたところで見物していたミゼットがグレアムを可哀相な目で見ながら言った。

「あれぐらい、まだ可愛いほうだ。本当なら40キロの亀の甲羅を背負わせながらやるんだから」

現在グレアムは20キロの亀の甲羅を背負いながら訓練している。

「………あんたは化け物ね。」

酷い言われようだな。

「さて、グレアムの腕も上がったし、そろそろ元の時代に帰る準備

をしないとな」

「あら？もう帰るの？」

ミゼットは意外そうに聞いてきた。

「ああ、いい加減に帰らないと出番が少ない奴^{なのは}とか、まだ出番が無い奴^{フェイト}とかから理不尽な暴力が贈呈されるからな」

「……そう」

ミゼットは俺の表情から何かを読み取ったのか、同情するような目で俺を見た。

「あ！そうだ！」

俺はミゼットに一通の手紙を渡した。

「ん？なんだい、これは？」

ミゼットは俺から手紙を受け取りそれを読んだ。

「これは、まあ、俺の悪巧みかな」

「ッ！これは！？」

ミゼットは手紙の内容を読んで驚愕した。

「ふっ、期待しているぞ。」

「あんたは本当に無茶苦茶ね」

ミゼットは呆れたように俺を見る。

「じゃ、あとは頼んだよ。グレアムの事は任せるから」

俺はそのままさくらとリインフォースの元に向かった。

「まったく、本当に厄介なことを頼むんだから………50年後にまとめてツケを払ってもらうんだから！」

愚痴をこぼしながらも日向を見送るミゼットの表情はどこか楽しそうだった。

枯れない桜の木の周辺

「転移成功っと」

俺達はイギリスから枯れない桜の木の近くに転移した。

「やっぱり、ここの桜はいつ見ても綺麗だな」

俺は桜の木に見惚れる。

「うん……………」

さくらはどこか懐かしそうで、それでいて悲しそうな表情だった。

「さくら、無理する————」

「やっと来たか。待っていたぞ」

俺の声は桜の後ろから聞こえる声に掻き消された。

「なっ！？誰だ！」

俺は警戒しながらリインフォースと一緒にさくらの前に立った。

「誰だはないだろ。これでも一応、同一人物なんだから」

そういいながらゆっくりと声の主は姿を現した。

「「なっ!？」」

俺達は声の主の姿を見て驚愕した。

「初めましてかな。よろしくな、本物の俺」

そこには、俺と同じ顔をした————葵、日向の姿が間違いないくそこに存在した。

第22話 枯れない桜の木での出会い

第22話 枯れない桜の木での出会い

「初めましてかな。よろしくな、本物の俺」

俺達は驚愕した。

「しかし、本当に瓜二つだな。どっから見ても俺だわ」

俺とまったく同じ人間が目の前にいて、喋っている。

「それにしても、まさか本当に本物の俺に会えるとわな。俺の直感バンザイだぜ」

どうやら直感で俺達が来るのを察知したらしい。

「で、何者なんだ？」

俺はなんとなく分かっているけど一応聞いてみた。

「俺か？俺は枯れない桜の木から生まれた葵日向のコピーだよ。さくらから聞かなかったのか？」

あっけらかんと俺は答える。

「ああ、聞いてるよ。さくらが世話になったな。礼を言うよ」

俺は軽く頭を下げて礼を言った。

「いや、そんなかしこまらなくていいよ。俺も結構楽しかったし」
物凄くフランクだな。本当に俺のコピーか？

「ハッハッハ、音夢の料理を食べば誰だって前向きになるさ」

「心を読まないでほしいな。あと、どんだけ朝倉家のポイズン料理人は凄いな！」

俺の性格をあんなにも変えるなんて……朝倉家の音夢は化け物か！

「まあ、お前も気をつけろよ。未来の世界……純一の孫には音夢のポイズンクッキングを継承した女の子がいるんだろう」

「由夢だな」

「由夢ちゃんだね」

俺とさくらはまだ登場していない朝倉家の二代目ポイズン料理人の名前を口にした。

「シャル以外にも料理で人を殺せる人が存在するのか!？」

リインフォースはシャル以外にも殺人料理人がいることのショックを受けていた。

「まあ、大丈夫だよ。俺はD・C?の中で由夢（妹的な意味で）が一番好きなんだからな」

※日向はロリコンではなく妹萌えな人種です

俺はリインフォースを無視して俺コペーと話した。

「そうか……それじゃ、さっさと俺の用事を済ませるか」

そう呟き、俺コペーは俺に近づく。

「どうするんだ？」

俺は取り合えず聞いた。

「なあに、簡単さ。俺の記憶と経験値をお前に渡す。ただそれだけさ」

「経験値引き継ぎ？」

RPGの二週目とかによくあるアレですね。わかります。

「えい」

そんな簡単な掛け声でいいんですか！

「終わったぜ」

「」「はやつ!?!」「」

俺の手を握って、簡単な掛け声だけで引き継ぎ完了ですか!?!?

「メモリーカードにセーブするよりも速いな」

「当社の売りは、情熱、思想、気品、優雅さ、勤勉さ、そしてなにより速さが一番なんですよ」

なるほど、どっかの兄貴なんですね。

「じゃあ俺からはこれをプレゼントするよ」

貰ってばかりじゃ悪いから俺はアレをプレゼントした。

「こっ！？これは！天元突破っ！？」

俺は俺に^{コピー}グレンラ○ンに変身できるデバイスを渡した。

「コイツがあれば桜の暴走とかなんとかできるだろ」

「あ、ああ。これがあれば百人力だぜ！」

「試作品だから長時間使えないけど、能力は本物と殆ど同じだからな。なんとかなるだろ」

「もち、気合いなら誰にも負ける気がないからな！」

うん、いい返事だ。本当に俺とは性格が違うな。

「さて、そろそろ行くか。……さくら、何かコイツに言い残すことは無いのか？」

俺は一応、さくらに心残りが無いか尋ねた。

「うん、大丈夫だよ。その役目は私じゃなくて、今この時代にいる私の役目だから」

さくらは何か吹っ切たように告げる。

「そうか……それじゃ、行きますか」

「うん、行こう。私達の居るべき時代に」

俺達はそのまま桜の木の下へ向かった。

「楽しかったぜ。あばよ。ダチ公」

俺がそう告げる。

「あばよ、じゃねえよ。お前の思いや記憶が『ここ』に一つになって生き続けるだろ」

俺は自分の胸を指で指し、力強く俺に答える。

「ああ、そうだな。またな、ダチ公！」

俺は一瞬ほうけた顔をしたが、すぐに力強くハッキリと答えてくれた。

「さくらのこと頼んだぞ。俺の最初で最後の主なんだからな」

「ああ、任せろ！一生守り通してやるよ！」

俺は力強い返事をしてさくらとリインフォースと共にこの世界から

姿を消した。

第23話 帰郷！帰ってきたついでにヒナギクをゲットしちゃった♪でも同じ年

第23話 帰郷

「海鳴市よ！私は帰ってきたぁー！」

俺達はまた上空からの転移により帰ってきた。場所は枯れない桜の近くだった。

グニユ！

「ぐはぁ！？」

「ん？」

なんか踏み付けたような？気のせいかな？

「ひ、日向くん…」

「ん？どうした、さくら？」

今、俺はさくらをお姫様抱っこしている。

「日向くん、下だよ」

うん？下？

「うわお！？なんだコレ？」

俺は黒いスーツとサングラスを装着した怪しい男を踏み潰していた。

「うわっ W W キモいな。マゾか、コイツ」

俺は問答無用で言葉という暴力を投げ付けた。

「あ、あの……………」

物陰からか弱い声が聞こえてきた。

「ん？」

「あ、あの、助けてくれて、ありがとうございます」

「え？ 助けた？」

俺がそう言うのと物陰に隠れていた声の主—————

ピンク色の髪の少女が姿を現した。

「は、はい。」

うむ、どうやらこの子はこのマゾ野郎に追われていたようだな。大方このマゾ野郎が子供に踏み潰される快感を得る為にこの子に執拗にお願いして怖くなったこの子が逃げ出してこのマゾ野郎が追いかける、そんなところか。

「大変だったな。でも、もう大丈夫だ。この変態はこのまま豚箱入りだから。」

そう言い、俺はこの変態を近くの刑務所に転移した。

「さて、これでいいか。」

「あ、あの、」

「ん？どしたの？」

「わたし、ヒ、ヒナギクといいます」

「ああ、名前か。ヒナギクね……………ヒナギク？あれ？」

ヒナギクって確か……………ハヤテのごとく？

「マジで？」

「は、はい」

マジかよ……………！？

じ、じゃあ、さっき転移した野郎って……………借金取り！？

「め、めんどくせー！ー！」

「あ、あの、すみませんでした！」

どうやら俺の心の中を読まれたようだ。

「い、いや、いいよ。大丈夫だから」

「うん、日向くんに任せれば大丈夫だよ。ヒナギクちゃん」

さくらは無責任にいい加減なことを言う。

「はあ、とりあえず、魔王になんとかしてもらおう」

俺はポケットから携帯電話を取り出して魔王に電話した。

「もしもし、魔王。俺だけど」

「オレオレ詐欺かい？」

「違うから！日向だから！」

「分かってるよ。ヒナちゃん♪それでどうしたんだい」

「ああ、実は……………」

「なるほどね。だいたいの事情はわかったよ。そっちのほうはなんとかしておくよ」

「ああ、たのんだよ。魔王」

「うん、任された」

ピッ

「とりあえずこれで借金取りのほうはなんとかなるな」

「あ、あの」

「よし！それじゃ芳乃家に帰ろうか」

俺はそういいながらヒナギクの手を握る。

「え？あの」

「さあ、『俺達の家』に帰るぞ。ヒナギク」

「うん♪帰ろうヒナギクちゃん」

さくらももう片方の手を握る。

「あ………はい♪」

そう返事してヒナギクは力強く俺達の手を握ってくれた。

「今日はらヒナギクの苗字は芳乃だな。」

「そうだね♪これからよろしくね。芳乃ヒナギクちゃん♪」

「はい♪」

俺達は手を繋いで芳乃家まで並んで帰った。

「ん？なんかヒナギク関連で大事な事を忘れるような？」

「どうしたの？日向くん」

「いや、なんか忘れてるような気がしてな」

「忘れるくらいだからきつとたいしたことないよ」

「それもそうだな」

「お腹すいたから早く帰ろう♪」

「ああ」

（そういえばリィンフォースどうしたんだろう？）

今頃になってリィンフォースの事を思い出した日向であった。

オマケ

「あ、あの、主。ただいま戻りました」

「お帰り、リィンフォース。」

「は、はい！」

リインフォースは一人だけ八神家に転移されていた。

「随分と遅い帰宅やったなあ？日向くんと二人で出掛けて何日も帰ってこないなんて、てっきり二人で駆け落ちでもしたかとおもったわ」

「い、いえ！断じてそんなことはありません！」

物凄いオーラを噴出するはやてにリインフォースは恐怖を感じていた。

「へえ、そうなんや。でも、皆を心配させた罰はきっちりうけてもらうから覚悟しとき！」

「あ、主い！？」

その日、始めて八神家で日向以外の悲鳴が轟いたのであった。

第24話 朝倉家！そこに居たのはギャルゲーのモテモテ主人公達だった！？

短くてごめんなさい

第24話 朝倉家！そこに居たのはギャルゲーのモテモテ主人公達だった！？

第24話 朝倉家

俺達は芳乃家で一休みしたあと、晩御飯を食いに隣の朝倉家にお邪魔した。

「ちわーす。純一居るか」

「誰だ？こんな夜遅くに、さくらと……………日向っ!？」

玄関から白髪の爺さんが出てきた。

「よう、久しぶりだな純一」

実際は初めましてだけどな。

「なっ!？お前生きてたのか!？」

「おい。勝手に殺すな!」

まあ、純一の知ってる俺は死んだけどな。

「そ、そうか…………あと数年早く来ていれば音夢にも会えたんだがなあ」

そうか…………音夢には会えないのか。一度会って見たかったんだが。

「そういや、お前の後ろに隠れてる子供はお前の孫か？」

純一の後ろに女の子二人と男の子一人が隠れていた。

「あ、ああ。乙姫、由夢、義之、このアホっぽい少年に挨拶しなさい」

だれがアホっぽいだ！

「朝倉音姫です」

ポニーテールの女の子が名前を覚えてくれた。

「桜内義之です」

少し感情の薄い少年が続けて自己紹介した。

「……………朝倉由夢です」

キター！妹バンザイ！この小説のメインヒロインの朝倉由夢だぜ！
(半分本気です)

「音姫と義之と由夢だな。俺は葵日向だ。由夢、俺のことはお兄ちゃんと呼んでくれ！」

「ううっ！」

由夢は人見知りが激しいのか音姫の後ろに隠れた。

「ははは、相変わらず妹属性に弱いな。日向」

「悪いか？」

「いや、むしろ相変わらずで安心しているよ」

どうやら純一は俺の事を大分知っているようだ。

「まあ上がれ。さくらの隣にいる子供の事も気になるしな」

そういや、まだヒナギクのことを紹介してなかったな。

「なるほどな……まあ、いいんじゃないか」

純一にヒナギクの事情を全部話した。

「金に関してはまったく問題無いし、さくらも家族が増えて万々歳だな」

今ヒナギクは音姫達と遊んでいる。

「うむ、じゃあ、大まかな面倒は純一に頼んでいいな」

「ああ、それで日向はどうするんだ？」

「俺か？……俺は、今住んでいる家の人を説得して面倒事を片付けてからだな」

主になのとはかすずかとかアリサとかはやてとか。

「なんとかなるのか？」

純一は俺の表情を察してか心配そうに尋ねる。

「まあ、大丈夫だろ。痛い思いをいっぱいするだろうけど」

「そ、そうか。相変わらず女性関連で苦労してるんだな」

純一はどこか遠い目をして俺を見る。

「なんとかなるよ。絶対大丈夫だよ！」

俺は純一ではなく自分に言い聞かせるように呟いた。

「日向くん頑張ってるね」

さくらに頭を撫でられながら慰められた。

「ありがとう、さくら」

「今日は三人で気の済むまで飲み明かそう」

純一が俺に気を使って酒を持ってきてくれた。

※お酒は二十歳からです

「純一もありがとう」

俺は軽く涙を流しながら純一の優しさに感謝した。

「今日は飲むぞーーーーー!!」

「もちろん!!」

その日、俺達は夜が明けるまで飲み明かした。

第25話 原点復帰！だけど原点が始めから狂っていたら意味がないような気がする

この小説はリリカル小説なのになのはとフェイトの出番が極端に少ないです

第25話 原点復帰！だけど原点が始めから狂っていたら意味がないような気が

第25話 原点復帰

「被告、葵日向の裁判を開始します」

「裁判官のアリサさん。彼の余罪は」

「無断外泊、無断婚約、私達の気持ちを知っていたのに知らないフリをした、余所で他の女にフラグを立てた、さらに私達の出番が少ない、以上です」

「裁判長のすずかさん。判決を」

「判決を述べる。被告、葵日向を極刑とする」

「極刑だっ！？」

今俺達は八神家で裁判みたいなのをしていた。

「極刑や！」

「酷すぎる！」

当然俺は異議を唱える。

「アンタが悪いのよ！」

彼女達の決定は覆らない。

「死ぬのは嫌！」

「ダメだよ日向君。私達は本気で怒ってるんだから」

彼女達は俺を殺したいらしい。

「だが断る！俺にはシスターなプリンセスを揃える野望があるんだ！こんなところで死ぬ訳にはいかないんだあ！」

「こんなところとはなんや！私の家を侮辱するんか！」

「今はそんな事どうでもいいのよ！」

「そうだよ、はやてちゃん。今はそんな事どうだっていいの」

「アリサちゃん、すずかちゃん。ひ、酷すぎるWW」

はやてはリビングの隅っこで丸くなっていじけた。

「だったらどうすれば許してくれるんだ！」

俺はこの平行線な状況を打開するために妥協案にでた。

「決まってるじゃない。あたしと婚約しなさい！」

アリサさんはストレートに言った。

「もちろん私ともだよ」

すずかさんも便乗した。

「私もや！」

はやてが悪ノリした。

「なんで私だけ冗談みたいに言うんや！」

なんとなくかな？

「酷い！？」

「あんたはどの小説でも同じ運命なのよ」

「そうだよ、はやてちゃん」

「酷すぎるっ！？」

「ほら、はやて元気だせ。婚約してやるから」

「なんか物凄く屈辱的やっ！？」

はやてはまたいいじた。

「はやてのことは置いといて、あんた明日ヒマよね」

「忙しいよ。」

「明日、皆で温泉に行くから支度しときなさい」

アレ？俺、忙しいって言ったよね？

「明日、駅前に集合だから遅れちゃダメだよ」

すずかさん、人の話を聞いてましたか？

「明日10時に集合だからね。ちなみに遅れたら………」

お、遅れたら！

「バカ犬！」

「!？」

ま、まさか！？ゼロの使い魔なのか！？

「アリスルート一直線なのか！？」

「私はギリギリまで吸い取るよ」

「!？」

ひ、貧血ルート！？

「ま、マジですか！？この小説にとらハ設定はないですよ！」

「今は私のターンだからなんでもアリなんだよ」

「くっ！？トラップカード発……」

「エクソディア召喚！」

な、なんだと！？

「お、俺の負けだと……………」

「日向君は私には勝てないんだよ」

すずかなんて恐ろしい子なの！

「何時までやってるのよ！」

「しょうがないな……………明日行けばいいんだろ」

「始めっからそう言えばいいのよ！」

ドSだよ。アリサ様だよ。

「はあ、疲れた……………もう帰る」

「明日遅れるんじゃないわよ！」

「はいはい。じゃあな」

俺は皆に挨拶して芳乃家に帰った。

（アリサ達以外の出番がまったく無かったな）

俺は守護騎士達に同情しながらも明日の準備で頭はいっぱいだった。

番外編 薔薇乙女との出会い！喋る人形が居たら腹話術が楽に出来るよね！でも

本当にごめんなさい。

今回はローゼンメイデンを知らないと分かりにくいです。

本当に申し訳ありません。

今回の番外編は過去編の話が短いと指摘を受けたので番外編で埋めてみました。

直感で書いたので読みにくいかもしれません。

番外編 薔薇乙女との出会い！喋る人形が居たら腹話術が楽に出来るよね！でも

番外編 薔薇乙女との出会い

50年前のイギリス

「ジャンクにしてあげる」

「なんで初対面の人形にそんなこと言われなきゃならんのだ？」

俺は水銀燈と絶賛対面中だった。

「フッフ、真紅との戦いを邪魔した罰は重いわよ」

俺は偶然夜の散歩をしていたら偶然、真紅と水銀燈の戦いを見てしまい何故か水銀燈に狙われてしまった。

「うおっ!？」

水銀燈の背中にはえてる黒い翼の黒い羽根が俺目掛けて襲い掛かってくる。

「そのままジャンクになりなさい」

「NO！お話しで解決しようぜ！暴力反対！」

やっぱり暴力は良くないよね♪

「暴力反対！ツンデレ反対！ヤンデレ反対！」

「……………消す」

逆効果だった。

「まったく駄目ね」

安全な場所で優雅に紅茶を飲んでる真紅にダメだしされた。

「いや！水銀燈と同じローゼンメイデンなんだからなんとかしろよ！」

当然俺は反論する。

「面倒だわ」

一蹴された。

「ジャンクになりなさい！」

ブォン！

水銀燈が西洋刀を振り回す。

「うおっ!?!」

髪の毛が何本か持って行かれた。

「しぶといゴミね。早くジャンクになりなさい！」

「嫌！？誰か助けてえ！」

俺と水銀燈の鬼ごっこはしばらく続く。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

「もう止めようぜ」

俺達の鬼ごっこは三時間も続いた。

「ふ、ふざけないで！アンタみたいなガキ一人、直ぐにジャンクにしてあげるわ！」

「そんな怒るなよ。ちゃんと乳酸菌とってる？」

俺は水銀燈の名セリフを使ってふざけた。

「バラバラにしてやる！」

余計に怒られせたようだ。

「あら、大変ね」

一人余裕で観戦中の真紅。

「面倒だな。真紅は役に立たないし」

「あら、私の家来なんだからアレくらいなんとかしなさい」

何時から俺はお前の家来になったんだよ！

「家来、早く終わらせなさい」

早速命令か。っていうかあんな怒り狂ってる水銀燈を簡単に止められたら苦労しないわ！

「侮様にはいずり回りなさい！」

さっきよりも大量の黒い羽根が俺達に襲い掛かってくる。

「まったく、役に立たない家来だわ」

真紅は文句をいいながらあっさりと避ける。

「これくらい自分でなんとかしろよ」

俺も余裕で避ける。

「ツッ！？なんで当たらないのよ！」

「坊やだからさ」

俺はとことんネタに走る。

ブ
チ
ツ

[illegible]

る！ジャンクにしてやる！ジャンクにしてやる！ジャンクにしてやる！ジャンクにしてやる！」

「こわっ！？めっちゃ怖っ！？」

どうやら完全に怒り狂ったようだ。

「家来、早くアレをなんとかしなさい」

マジですか真紅さん……………

「ち、近づきたくねえ」

水銀燈は辺り一体を破壊し尽くす破壊神と化していた。

「早くしなさい！」

四面楚歌だよ。

「ああもう！やればいいんだろ！殺れば！」

俺は勇気を振り絞り

「グレアムバリアー！」

「グハァ！」

グレアムを目の前に転移して俺の盾にしちゃった♪

「グレアムハンマー！」

「ブヒャアーーーー!?」

俺はグレアムをハンマーみたいに使って水銀燈を殴った。

「グレアムロケット!」

「ブルアアアアアア!」

俺はグレアムをジャイアントスイングの要領で投げた。

「これで最後だ!」

俺は再びグレアムを掴み

「グレディオンハンマアアアアアアアアア!」

「■■■■」

もはやグレアムの言葉は理解不能だった。

「グレアムになれーーーーー!」

「■■■■」

辺り一帯がまばゆい光に埋めつくされグレアムは光になった。

「あとは任せるよ真紅」

俺はグレアムという犠牲を払って水銀燈を倒した。

「仕方ないわね」

真紅は優雅に紅茶を飲みながら答えた。

「じゃあ俺は帰るよ」

そう言い俺はモザイクのかかったグレアムを引きずった。

「そう、また後で会いましょう日向」

「え？」

俺が後ろを振り向いたら

「薔薇……………」

夜の空を紅い薔薇の花びらが綺麗に舞っていた。

「バイバイ真紅、水銀燈」

俺は今度こそグレアムを連れて帰った。

第26話　そこは湯の町海鳴温泉！フルメタルなパニックのキャラクターは居る

ごめんなさい！

感想が怖いので取り合えず謝っておきます。

最新新しい感想が来るたびに脅えています。でも激励の感想が来た時はとっても嬉しいですよ。

第26話　そこは湯の町海鳴温泉！フルメタルなパニックのキャラクターは居る

第26話　解読不能？

俺は今、士郎さんが運転する車の後部席に座っている。

「のだが！なんで俺は縛られてるんだ！？」

俺は鎖で全身をぐるぐる巻きにされていた。

「ヘルプミー！誰か助けてっ！」

「あんたが忍さんの運転する車に乗ろうとするからでしょ！」

アリサが俺のボディーに一撃食らわせながら噛み付く。

「だってお前等怖いんだもん」

誰が俺の隣に座るか凄いい揉めたんだよ。……鬼の形相で。

「まったく！……それにしてもはやては残念だったわね」

「しょうがないだろ。リハビリ中なんだから」

はやてはリハビリと通院が重なって今回は見送りになった。お土産に鉄製のハリセンを買ってきてとお願いされたが世界中の何処にもそんなお土産が有るはずはない。

「それより、いい加減この鎖を解いてくれないか」

「それはダメだよ♪」

「すずかさん……なんで清々しい笑顔なんですか!？」

「そうだよ日向君! 鎖を解いたら逃げるでしょ?」

「なのは……ほんとに久しぶりの出番だね。」

「そうさ! 俺は逃げも隠れもするさ!」

「だって皆ヤンデレ化するんだもん。マジこえーよ。」

「それ、格好悪いよ」↑なのは

「いいんだよ。人の命は安くないんだ。特に俺のはな!」↑日向

「ホントに悪役のセリフね」↑アリサ

「やられ役のセリフだね」↑すずか

「キュー! (本当に主人公のセリフとは思えないよ! こんな主人公なら僕が変わりに主人公になったほうが――――以下略)」
↑ユーノ

「ああ、そうだよ! 俺は主人公らしくないよ! いいじゃないか! 悪役下っ端主人公だって。世界が狂ってるなら (周りがヤンデレ化してるなら) 俺は俺を信じて逃げる!」

「日向君だったかな。君も大変だね」

運転中の士郎さんが俺に同情してくれた。

「そう思うなら止めて下さいよ。貴方の娘さんも原因の一つなんですから」

「あら、それは駄目よ♪」

助手席に座る桃子さんが待ったをかける。

「なんでですか？」

「だって、その方が面白いからよ♪」

なんの悪びれもなく言い切ったよこの人！？

「高町家の最強はやっぱりこの人か………」

四面楚歌だな。

「俺はもう疲れたよプリムラ、由夢」

俺は大事な妹達にテレパシーを送りながら、うなだれた。

疲れた俺は旅館にたどり着いたあと速攻で温泉に入った。

「やっぱ温泉は最高だな♪」

「おや、日向君じゃないか」

士郎さんと恭也さんが入ってきた。

「てっきりなのは達に振り回されてると思ったんだがな」

恭也さんは遠慮なしに言う。

「捕まる前に温泉に逃げ込んだんですよ」

だって捕まったら最後、女風呂に連れていかれてしまうからな。

「そ、そうか……………」

恭也さんは哀れみの目で俺を見た。

「最近色んな人達から同情されてる気がする」

俺は落ち込みながらもプリムラ達の事を思い出し、なんとか耐えてみせた。

「そういえば恭也さんは……………」

「日向、お前は一体何者なんだ？」

ビクッ！

単刀直入に来たな。

「嫌だなあゝゝなに言ってるんですか恭也さん。俺はどこにでも居る平凡な子供ですよ」

「そうかい？日向君の身のこなしといい筋肉の付き具合は普通の子供のとは掛け離れているんだが」

士郎さんが逃げ口を塞ぐ。

「そ、それは、いっぱい修業しましたから」

嘘は言っていない。実際この身のこなしは努力して得たものなんだから。

「一体どんな修業をすればそんな風になるんだい？」

「それはですねえ――――」

「……………のぼせたよ」

俺達はすっかり修業の話に盛り上がってしまっていて長い時間温泉で口論をしまくった。

「おかげでアルフの絡みイベントを逃してしまった」

部屋に戻るとアリサがピーピー文句を言っていたよ。

「今の所、フェイトのイベントは全部回収失敗だな」

リリカルで主役の一人であるフェイトの出番はまったく無かったのだ。

「この小説ってさ、本当にリリカルなのは小説なのか？」

俺はついつい疑問を口にだしてしまった。

『大丈夫です!』

「うわっ!？」

エボルトが突然念話で話し掛けた。

「うわー。ほんと久しぶりだな。三ヶ月ぶりかエボルト」

『それはリアルでの時間ですよ主ッ!？』

「ハハハ、ゴメン、ゴメン。つい本音が出てしまった」

『主、一体いつになったらこの小説は真面目な小説になるんですか？』

「無理じゃね。だって俺自体がありえないほどのチートだし」

『確かに――――』

「楓ちゃんが待っているし早く帰ろうか」

ん？

「あれは……………」

確か…………土見夫妻と芙蓉紅葉ふようもみじさんだったかな？

「ごめんなさい。楓の為に」

これは確か…………楓のヤンデレルートのきっかけだったかな？

「ってことは……………」

回避しないとな。主に未来のハーレム王の為に！

「時間が無いな。これは早めになんとかしないと……………」

「さあ、帰ろうか」

ヤバイ！？ヤンデレが！？

「待って下さい！」

取り合えず俺は三人を呼び止めた。

「ん？ 私達に何か用かな。」

呼び止めには成功したけど、なにも考えてねーや！？

「え、えーと……あの、」

マジでどうしよう……このままだとあなた達は死んでしまうとか言っても信じるわけねーよな。

「とくに用事が無いならこれで失礼させてもらうよ。少し急いでるからね」

ヤバイ！ どうしよう！ どうしよう！

「あっ—————」

結局俺はなにも言えずに土見夫妻と紅葉さんはそのまま旅館を出た
……………

一時間後

「ツモ！」

「清一、対々、三暗刻、三槓子、赤一、嶺上開花！」

「なんだと!？」

「32000ですよ恭也さん♪」

俺達は麻雀をしていた。

「数え役満だと!？」

あのあと俺は急いでバレないように土見夫妻と紅葉さんが乗る車のタイヤをパンクさせたのだ!

「強いね。日向君」

「いえ、運が良かっただけですよ土見さん」

結局帰れなくなった土見夫妻と紅葉さんは旅館にもう一泊することになり、偶然出会った土郎さんと意気投合して今に至る。

「これで恭也さんの持ち点は無くなりましたね♪」

「くそっ! 何故俺ばかり狙うんだ日向!」

俺は重点的に恭也さんを狙い点数を荒稼ぎした。

「何故って貴方が『一番弱い』からですよ♪」

「なんだと！」

今の面子は俺、恭也さん、士郎さんと土見さん（父）の四人だ。

「この中で経験が最も浅くて、尚且つ俺が狙う事ができるのは恭也さんだけですから」

士郎さんを狙えば土見さんに潰され土見さんを狙えば士郎さんにやられる。出会って間もないとは思えない絶妙なコンビネーションだったよ。

「流石、管理局の白い悪魔の父と未来のハーレム王の父だな」

俺は直感的にこの二人には勝てない（麻雀で）と悟った。

「もう一度勝負だ！」

「懲りないですね恭也さん」

「うるさい！とにかくもう一度勝負だ！」

「はいはい、分かりましたよ。もう一回だけですよ」

∩ (・ω・) つー、
／／日向／／
L ／C、ノLー／
ー

／＼絶賛、／＼／
／ 嶺上開花中／
――――

結局恭也さんは俺達に一度も勝つ事が出来ず、俺達は朝まで延々と麻雀を続けた。

（しまった！またフェイトイベントを逃した！？）

俺はその日、アリサとすずかに（徹マン後に睡眠を取らずに）連れ回されながら一日中落ち込んでいた……………

第27話 一つを選択！この小説のすずかとアリサはなのは達よりも輝いていま

どうもサンクスです

いやーようやくなのはの無印が終盤の差し掛かってきました。

そこで！今後のメインキャラを決めるための人気投票をしたいな～なんて思っている今日この頃、出番を増やしたければ読者の人気を勝ち取るみたいな感じです。

もしよろしければ誰かお気に入りキャラに一票入れてくれるとありがたいです。

登場していないキャラや作品でもOKですよ♪

第27話 一つを選択!この小説のすずかとアリサはなのは達よりも輝いていま

第27話 一つを選択

芳乃家茶の間

「なのはの様子がおかしいのよ!」

現在、アリサとすずかが芳乃家に来てアリサが暴走している。

「誰にだって様子がおかしい時ぐらいあるさ」

俺はちゃぶ台に乗せてある珈琲を飲みながら淡々と答える。

「違うわよ!アタシが言ってるのはなんで悩んでるのに親友のアタシ達に相談しないのかって事よ!」

「おいおい、誰にだって知られたくない事、相談しにくい事、色々あるだろ」

「そんなこと解ってるわよ!でも親友として放って置けないじゃない!いい!」

バンっ!と両手でちゃぶ台を叩きながらアリサは俺に絡む

「まあ、お前の気持ちも解らんでもないし、お前達に覚悟があるなら協力してやらん事もないが……」

「「本当っ！」」

息がピッタリだな。

「ああ、本当だ」

「それで、どうすればいいのっ！」

アリサは俺の胸倉を掴みながらグラグラ揺らしてくる。

「まあ落ち着け。まず、なのはが何について悩んでるのかを教えるやる」

俺は珈琲を飲みながら一息ついた。

「まず、なのはは今、魔法関連の事件に巻き込まれている。」

「魔法って神界や魔界のじゃなくてはやてちゃん達が使ってる魔法？」

さすがが聞いてくる。

「ああ、その魔法だ」

「でも、なんでなのはがそんな事件に巻き込まれているのよ」

当然の疑問だな。

「なのはは向こうの世界でも珍しい程の膨大な魔力を持っているんだ」

「なのが？」

「ああ、そのせいでなのは偶然出会ってしまったんだ」

「偶然出会った？」

「ああ、ユーノにな」

「ええっ!？」

うん。
いいリアクションだ。

「ユ、ユ、ユ、ユ、ユーノってそっち側のフェレットだったの!？」

「フレットっていうかアイツは人間だな」

「えええー！？」

本日二回目の息の合ったりアクションです。

「つ、つ、つ、つまりアタシ達はこの前、男と温泉に入ったってことなの!？」

ああ、そういうばそうだな。確かアリサがユーノを洗ったんだっけ？

「ああ、そうだね」

そう言うとき二人は両手で頭を押さえながら苦悩している。

「それで、なのはに協力したいなら俺がお前達を鍛えてやるって、

聞いてるのか？」

二人はまだ苦悩している。

「まあ、いいか。それで本当に覚悟があるのなら、明日もう一度ここに来い。その時にお前等の覚悟を聞いてやる」
俺はそう言って二人を追いつ出した。

「……………明日から忙しくなるな」

次の日アリサとすずかはそれぞれが胸に秘めた覚悟を俺に教えてくれた。

こうして俺はアリサとすずかに魔導師になるための訓練をすることになった。

アリサとすずかの訓練一日目

「まず、お前等にデバイスを授ける」

日向はアリサとすずかに赤と青の二つのデバイスを渡した。

「アリサのデバイス、これは接近戦仕様のデバイスで名を『サンライズハート』と名付けた」

「サンライズ……ハート………」

アリスは自分のイヤリングの形をしたデバイスを握りしめて、嬉しそうにサンライズハートの名を呟く。

「そんですずかのデバイスだが、これは状況に合わせて接近戦も長距離戦も戦えるオールラウンドタイプだ。名前は『ムーンエンジェル』だ」

「ムーン…エンジェル………」

すずかは指輪の形をしたムーンエンジェルの名を呟き嬉しそうに握る。

「それで、最初の訓練は見切りの練習だ」

日向は魔力弾を多数形成した

「まずは一弾ずつ確実に避けていこうか」

※ここからは音声でお伝えします

「いけっ！フィンファンネル！」

「ちよっ！？何処が一弾なのよお！」

「速いし多いよ日向君！」

「確率変動弾発射あ！」

「そんなの避けられる分け無いでしょー！？」

「命中率100%は流石に無理だよお！」

「ひらめきと不屈を使えばなんとかなる！」

「どこのスパロボよ!？」

「私達ロボットじゃないから無理だよ！」

「そんな問題じゃないでしょ！　すずか！！」

「大丈夫だ東方○敗とかジャイアント○ボの敵とか生身で普通に使えるから」

「そいつらは人間としてのカテゴリーに入っていないわよ！」

「確かに普通に大気圏を突破出来そうだね」

「無駄口叩いてる暇はないぞ！ここでしつかり実力を着けないとしばらく出番が失くなってなのはと同じ目に合うぞ！」

[illegible]

「プレシアを倒したらしばらくはフェイトオンリーだからな。他のヒロインの出番はしばらくありません!」

「ちよつと！？　どういう事よ！　この小説のメインヒロインはアタシとすずかでしょ！」

「何を言ってる！この小説の超メインヒロインは由夢とプリムラだ！おまえらはたまたまこの小説で出番が多いメインキャラなだけだ！」

「なんですってえーーーーー！！」

「そんな……………」

「甘ったれるんじゃない！ねだるな！勝ち取れ！さすれば与えられん。これはかの有名なアド○ック・サーストンの言葉だ。お前達も勝ち取ってみせろ」

「ねだるな…………」

「勝ち取れ…………」

「さすれば与えられん」

「そうだ。お前達なら読者の人気を勝ち取れる！」

「「アタシ（私）の歌を聞けーーーーー！」」

銀河の歌姫ですね、わかります。

「その調子だ！目指せ地球の歌姫！」

そんなノリと勢いで修業はフェイトが管理局に捕まるまで続いた。

第28話 新たな道を歩き始める為の第一歩！それは少女を一つ大人にする階段

……文才が欲しい……

第28話 新たな道を歩き始める為の第一歩！それは少女を一つ大人にする階段

???

「待たせたな諸君！準備はいいか！」

「「「「「「「「「「」

「いくぞ！これが俺達『大紅蓮団』の初陣だぁーーーーー！！！」

第28話 始める為の第一歩

時の庭園

「うわお、粉々なロボット兵がうじゃうじゃ居るぜ♪」

俺達——ヴォルケンリッターとアリサ、すずかのメンバーで時の庭園に乗り込んだ。

「随分と悠長だな日向」

シグナムが呆れたような顔で言う。

「そうだな。これから大魔導師と戦えると思うとワクワクするな♪」

「仕方のない奴だな。それで我々は何処に向かえばいいのだ」

ザフィーラが喋った!?

「俺以外の全員は駆動炉に向かってくれ。既になのは達が向かって
いる。俺はプレシアの元に行く!」

「駆動炉をブツ壊したらどうすればいいんだ?」

ヴィータが聞く。

「アースラに行ってくれ。そこでミゼットの名前を出せば拘束される
ことはないだろう。」

「ああ、ミゼットに通信をすればいいんだな」

リインフォースはミゼットと顔見知りだし話もスムーズに進むだろ。

「ああ、予定通り頼んだよリインフォース」

「分かった予定通りだな」

リインフォースには50年前のイギリスでとある計画を教えている。

「そんじゃ、ちょっくら行ってくるぜ!」

俺は転移魔法でプレシアの居る場所まで跳んだ。

「後、もう少し……………」

ジュエルシードが九つとアリシアが入った生体ポットが並ぶ部屋。
そこにプレシアは居た。

グゴゴゴゴゴゴゴ

「ここも長くは持たないわね…………ウグッ!？」

プレシアは血を吐き蹲る。

「大丈夫かプレシア」

プレシアの隣に漆黒の鎧を身に纏った一人の男が現れた。

「ええ…………大丈夫よギルツ…………」

プレシアはゆっくりと立ち上がる

「そうか…………もうすぐ来るぞ。」

「来る? 誰が……………」

プレシアは目だけギルツを見て聞いた。

「……………我が覇道を阻む可能性のある物だ！」

ギルツはここに向かって一人の男を待っていた。

「早く来い！ 覇王たる資格を持つ物か、この眼で見定めてくれるわ！」

ゴゴゴオオオゴゴゴゴ

「見定める前に、この————」

「プレシア・テスサロツサ。終りですよ。次元振は私が押さえています。駆動炉もじき封印。貴女の元には執務官が向かっています。忘れられし都、アルハザード。そしてそこに眠る秘術は存在するかどうかすら曖昧なただの伝説です。」

リンディが現れた。

「ツッ！？ 違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が碎かれた時。その狭間にかつらくしていく輝き。道は確かにそこに有る！」

プレシアはリンディを睨みながらリンディの言葉を否定する。

「随分と部の悪い賭けだわ。貴女はそこに行って一体何をするの。失った時間と犯した過ちを取り戻す？」

リンディは更に問う。

「そうよ。私は取り戻す。私とアリシアの……過去と未来を！取り戻すの。こんなハズじゃなかった世界の全てを！」

プレシアは当然と言わんばかりにリンディに答える。

ゴォォン！！

青い閃光が壁を貫きそこから額から血を流したクロノが現れた。

「世界は何時だって、こんなハズじゃない事、ばっかりだよ。ずっと昔から、何時だって、誰だってそうなんだ！」
クロノはプレシアに向かって吠える。

「こんなハズじゃない現実から、逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ。だけど、自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利は、何処の誰にもありはしない！」

喋ってる間にフェイトとアルフが到着したが、クロノはちらつとフェイトを見てからプレシアを見据える。

「ウグッ！？ゲホッ！ゲホ！」

プレシアは血を吐きながらむせる。

「母さん！？」

フェイトは苦しむプレシアが心配で急いで近づこうとするが

「何をしに来たの……消えなさい。もう貴女に用はないわ」

プレシアは近づくフェイトにキツイ言葉を投げかける。

「貴女に言いたいことがあって来ました」

フェイトは立ち止まりながらも覚悟を決めた顔でプレシアに語りかける。

「う…うッ！」

プレシアは杖で己の身を支えながらフェイトの話しを聞いた。

「私は…私はアリシアテスサロツサじゃありません。貴女が作ったただの人形なのかもしれません」

フェイトはゆっくりと、

「だけど…私は…フェイト・テスサロツサは、貴女に生み出してもらって、育ててもらった、貴女の娘です。」

プレシアを見つめながら己の気持ちを伝える。

「ウフ、フフフフフ、アハハハハハッ、だから何？今更貴女を娘と思えと言うの？」

だが、プレシアはソレを一蹴する。

「貴女が…それを望むなら」

それでもフェイトは止まらない。

「それを望むなら、私は、世界中の誰からも、どんな出来事からも、貴女を守る！」

プレシアの人形ではなく

「私が貴女の娘だからじゃない。貴女が私の母さんだから！」

一人の人間としてフェイトは思いを伝えた。

「フッ、下らな————」

「随分と盛り上がってるじゃないか。」

部屋の入口——そこにゼファアを握りながら余裕の笑みを浮かべる日向の姿があった。

三十万アクセス記念 日向の異世界旅行 コードギアス編 らき☆すた編 NG

今回の魔法少女リリカルなのは 最初の魔導師と転生者は

異世界旅行編

◆コードギアス編

◆らき☆すた編

NG集

◆八神はやて祭

の三本でお贈りします

三十万アクセス記念

コードギアス編

ダモクレス

「今日こそは決着をつけるぞ。ルルーシュ！」

「望むところだ日向！」

今俺は皇帝ルルーシュと対峙していた。

「俺の方がナナリーの兄に相應しいんだ！」

「何を言う！正真正銘俺がナナリーの兄だ！」

外でブリタニア軍と黒の騎士団が戦ってる中、二人はどっちがナナリーの兄に相應しいか口論していた。（二人の言い争いはリアルタイムで全世界に中継中である）

※ルルーシュは中継されている事は知りません

「お前には無理だルルーシュ」

「それはこっちのセリフだ！」

この言い争いはコードギアス第一話から毎回やっていた

「お前みたいなモヤシはナナリーを幸せに出来ないんだよ！」

「貴様だってモヤシだろう！」

低レベルな言い争いである

「俺には今まで多数の妹を幸せにした実績があるんだよ！」

「っ！それがどうした！俺は今までもこれからナナリーを幸せにすると誓ったんだ！これまで犠牲になった物達の為にも俺はここで引くわけにはいかんだ！」

二人は全世界に溢れんばかりのシスコンをさらけ出していた

「見ろルルーシュ！」

日向は懷からアルバムを出した

「ムッ！これはっ！？」

そこには様々なナナリーの写真が納められていた

「どうだルルーシュ！このナナリーの写真集はっ！欠伸を見られて恥ずかしがるナナリーにアイスクリームを美味しそうに食べるナナリー！そして安らかに眠るナナリーの姿は素晴らしいだろう！」

「ムグッ！？す、素晴らしい写真集だ。だ、だが！」

ルルーシュは鼻血を出しながら懷から一通の手紙を出した

「これはナナリーが俺の誕生日に書いてくれた手紙で日頃の感謝とナナリーの愛が籠った手紙だ！そして文章の最後にお兄様大好きと書かれた俺の宝物だ！」

「グハッ!？」

日向は血を吐きながら膝をついた

「お兄様好きだと！なんてうらやゲフン！ゲフン！だったら俺はコレだっ！」

日向はポケットから一枚の写真を取り出した

「なっ!？それは!？」

ルルーシュは日向が見せた写真に驚愕した

「ルルーシュ。君は……………」

「最低……………」

外で命懸けの戦いをしていたスザクは可哀相な物を見るような目でリアルタイムで言い争いをしているルルーシュと日向をモニターで見てカレンは汚物を見るような目でルルーシュを見ていた

「ポカーン（。O。）」

黒の騎士団の面々、C・Cやブリタニアの兵士はあまりの低俗な展開について来れず呆れていた

「……………記録」

カシャ

「……………」

アーニヤは何時も道理な表情で言い争っている二人を写真に収めジュレミアは固まっていた

「もう！お兄様と日向さんなんて大っ嫌いです！／＼／＼」

顔を真っ赤にしたナナリーが急いで二人の元に赴きシスコンの二人に死刑勧告をして青年二人が正座をして年端のいかない少女に説教されているシュールな光景は正気に戻ったジュレミアが世界中に流れている中継を止めるまで世界中の人々に見られていた……………

「ゆーちゃん。俺の事を日向お兄ちゃんと呼んでくれ！」

陵桜学園の屋上……お昼時にこなた、かがみ、つかさ、みゆき、ゆたか、みなみと昼食を食べている時に日向は唐突にゆたかをお願いした

「えっ！あ、あ、あの日向先輩っ！」

ゆたかはいきなりの発言に顔を赤くしながらアワフサとテンパっていた。

「ちょっと日向君！何いきなりこなたみたいな発言してるのよ！ゆたかちゃん困ってるじゃない！」

当然この状況で冷静にツツコミが出来るのはかがみのみである

「これはシスコンの使命！いや！義務、運命なんだ！だから余計な口出しはしないでくれツンデレ」

「ちよっ！？誰がツンデレよ！」

ツンデレと言われたかがみは当然噛み付く。ツンデレだから

「かがみん落ち着きなよ」

「怒っちゃダメだよお姉ちゃん」

「冷静になって下さいかがみさん」

「…………怒ったら負けです」

こなた、つかさ、みゆき、みなみがかがみを宥める

「ハア、ハア……分かったわよ。冷静になればいいんでしょ」

かがみは皆に説得され冷静さを取り戻した

「すぐに怒るかがみんも悪いけど日向君も自重しないとダメだよ」

珍しくこなたが常識を語る

「そうだな。すまなかったなかがみ。お前の気持ちに気付かずヒドイ事を言ってしまった」

日向は頭を下げ謝罪した

「うっ、まあ分かればいいのよ。まあ、その、私もいきなり怒鳴り付けて悪かったと思ってるし」

素直に謝罪されて少し戸惑いながらもツンデレなかがみであった

「と言う訳で、さあ、お兄ちゃんって呼んでごらんかがみ♪」

「「「「えっ!!?」「」「」」」」

突然の日向の発言に全員驚いたΣ（。ロ。ノ）ノ

「かがみもお兄ちゃんって呼びたかったんだね。かがみの熱い思いは良く分かったよ。さあ！遠慮なくどんどんとお兄ちゃんと呼んでくれえ♪」

「えっ!?!あのっ!?!日向君っ!?!」

当然かがみは顔を真っ赤にしながら動揺する

「ホラ、お兄ちゃんだよ。かがみ」

日向はガンガンいこうぜ状態である

「ひ、日向く「お兄ちゃん!」は、はい。お、お…兄ちゃ…ん…／
／／／／／

かがみは強引な日向の戦法により遂に陥落した

「もっと大きな声で言うんだ!さあ、腹の底から思いの丈を叫ぶんだ!」

日向はさらにガンガン攻めた

「お兄ちゃーん!」

かがみは日向の強引な言葉に冷静さを失っていた

「まだだ!もっと大きな声で!」

「お兄ちゃーん!」

「ハア、ハア…なにやっとなるんや!お前等!」

黒井先生が息を切らして屋上に現れた

「トン〇ラとゲレ〇レどっちがええ？」

「!?!?」

闇の書は精神的なダメージを受けた!

「闇の書が悶絶しています」

両手で頭を押さえながら悶絶している闇の書を見てレイジングハートはなのはに告げる

「??.?」

突然悶絶しだした闇の書を見たなのははどう対応していいか分からなかった

NG集第二話 へりにて

泣いてるスバルの頭を優しく撫でるのはを見ていたはやて達

「……………知り合いなの？」

フェイトははやてに聞く

「アレやよ。————ホラッ」

人差し指を立てながらはやては言う

「一目惚れってヤツ♪」

おふざけ満天であった

ブチッ

「……………バルディシュ……………セットアップ……………」

次の日はやては病院に入院していた

NG集第三話　このはやてはチートです

スカリエッティ一味による地上本部と六課襲撃時にて

カツカツカツ

炎上する機動六課にて一人の足音が聞こえる

「……………っ！」

カツカツカツカツ

「この揉み魔めっ……………」

六課を襲撃した少女……………ルーテシアは胸を隠しながら脅えていた

カツカツカツ

「揉み魔でええよ。揉み魔らしいやり方でセクハラさせてもらうから」

この日……地上本部と機動六課を襲撃したナンバーズとアギトならびにルーテシアは一人の揉み魔によって汚された

NG集第四話 クワットロをゲットだぜ♪

はやては聖王のゆりかごでなのはと合流した後、クワットロを確保しに行った

カツカツカツ

「……………」

当然クワットロはなのはの砲撃をまともに喰らい気絶中である

カツカツ

「……………」

はやてはクワットロを一瞥した

「……………いただきます」

第29話 覇王との出会い！次のターンはシリアス？それとも笑いですか？（前）

ごめんなさい今回も短いです。

第29話 覇王との出会い！次のターンはシリアス？それとも笑いですか？

第29話 覇王との出会い

「俺を省いて随分と盛り上がってるじゃないか」

プレシア達が集まる一室、そこに日向は到着した。

「だっ！誰だっ！」

クロノが日向に杖を向けて威嚇する。

「通りすがりの大紅蓮団のリーダーだ！」

「「「大紅蓮団っ！？」「」「」」

「へえ、俺の大紅蓮団を知ってるのか？（どうやらアイツ等は上手くやってるようだな♪）」

「知っているも何も、大紅蓮団といえば管理世界で知らない人は居ないと言われてる程の超少数精鋭の組織じゃないか！」

クロノは額から血を噴き出しながら答えた。

「それで、貴方がその大紅蓮団のトップなの？」

リンディは半信半疑な表情で日向に聞く。

「おうよ！（まあ、実質これが大紅蓮団のリーダーとしての初仕事だけだな）」

日向は左腕を上には振り上げ人差し指を天に指す。

「漢の魂背中に背負い！不撓不屈の鬼リーダー！日向様ったあ俺の事だぁ！！」

（決まったぜ！今の俺、最高に天元突破だぜ！）

シンン……………

（アレっ？皆、固まったまま動かないぞ）

ポカーン（。㇏。）

（誰かなんとか言えよ！マジで緊張するだろうが！）

「フハハハハハハッ！待っていたぞ！我が覇道を阻む物よ！！」

「ムッ！何奴ッ！？（マジで誰だ？）」

日向はプレシアの隣に立っている男を見た。

（アレ？あんな鎧姿のオッサン、原作にいたっけか？）

「待ち焦がれたぞ！ゼファアが主と認めた伝説の騎士よ！」

漆黒の鎧を身に纏い他者を威圧するオーラを醸し出すその男は日向だけを見つめる。

「アンタ誰？」

「我が名はギルツ！この世で最強にして唯一の絶対なる霸王だ！！」

（最強？そんなのお師匠様（悟空）に決まってんだろ！）

「貴様が霸王たる資格があるかここでツツ！？」

「うるせえよ……」

日向はギルツとの距離を一瞬で縮めてギルツの隣にいるプレシアのボディーに一撃食らわせて気絶させた。

「その金髪幼女、犬耳、KY、この頑固な病人と生体ポットを持つてさっさとアースラに戻れ。ここはじきに崩壊するからな」

日向はプレシアとアリシアの入った生体ポットをクロノの前に転送して、ちらっとギルツを見た。

「……やはり貴様は我が覇道を阻む最大の障害だ！」

「霸王だか魔王だかなのはだか知らねえが、俺はお前に構ってるほど暇は無いんだよ！（早く由夢やプリムラを愛でたい……）」

「……いずれ貴様は絶対に霸王への障害になる」

「……………そうか（……………帰っていいかな）」

「さあ、構えろ。我が剣の錆にしてやる！」

ギルツはそう日向に告げ剣を構えた。

「ほんの少しだけ遊んでやるよ。チートに喧嘩売った事を後悔させてやる！」

日向は久々のバトルモードに入り魔力を全開にした。そして、この状況についてこれないクロノ達はただ呆然と立ち尽くしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5617j/>

魔法少女リリカルなのは 最初の魔導師と転生者

2010年10月16日11時53分発行